狂歌三十六歌仙

完

り
22

ガラス使用

狂歌三十六歌仙

完

さくら[illegible]
全壱冊

り
22

ガラス使用

丙春日

狂歌三十六歌仙

千穐庵撰

帝國圖書館藏

明治二九・三・二三・購求

ガラス使用

詠歌渺は謡の風月貧に代々の聖皇の未然に兆し六くさの歌仙古今集に発てこのはは六くさの数を次て手てうたやまへのかまへをいできてけし今や此時に夷曲と唱へ小雀の鳴をするものちんを大鵬の羽をはらはんとすやおい
そも戯場のせりふみなれど楽屋の黒幕ほとりほとる姿見の鏡山にむかへし小町は紅粉けさうするおもひ業平顔のみこそ鳴き面は粧ひあらぬ遍照が太刀にきよまりし馬の跡足をこひ或ハ康秀が吹へ山の訪ひにおぬねを移す嵐とほむる誉詞のあやしよと思ふかくて何せん菜の喜撰はまてうかなしまかゝる起つて筆を咽て夷曲三十六歌撰と名付外題の板ハ横ぬきの我才世にふる三陀羅ほむら春やむよ思ひきや此見臺よわりしされて序の一飾をかく見へよと言続の苑は浮世をうちとらんやゝさいちのおの筆

勝川春

五

国立国会図書館

春

たしかいき
なつそとや
えんけそひ阪
おく狂歌堂の住多の
浅し白

鈴女

夏

涼しきを
后夜れ
饗ても
うもく
ゆまうり

風吹くおろ雪
夜のふ
さやし

芦邑　小西凡

秋

みりしろや花れ
井乃てそろ菊れ
蝗蝶ふ成よ
秋のくさ
ちるまて

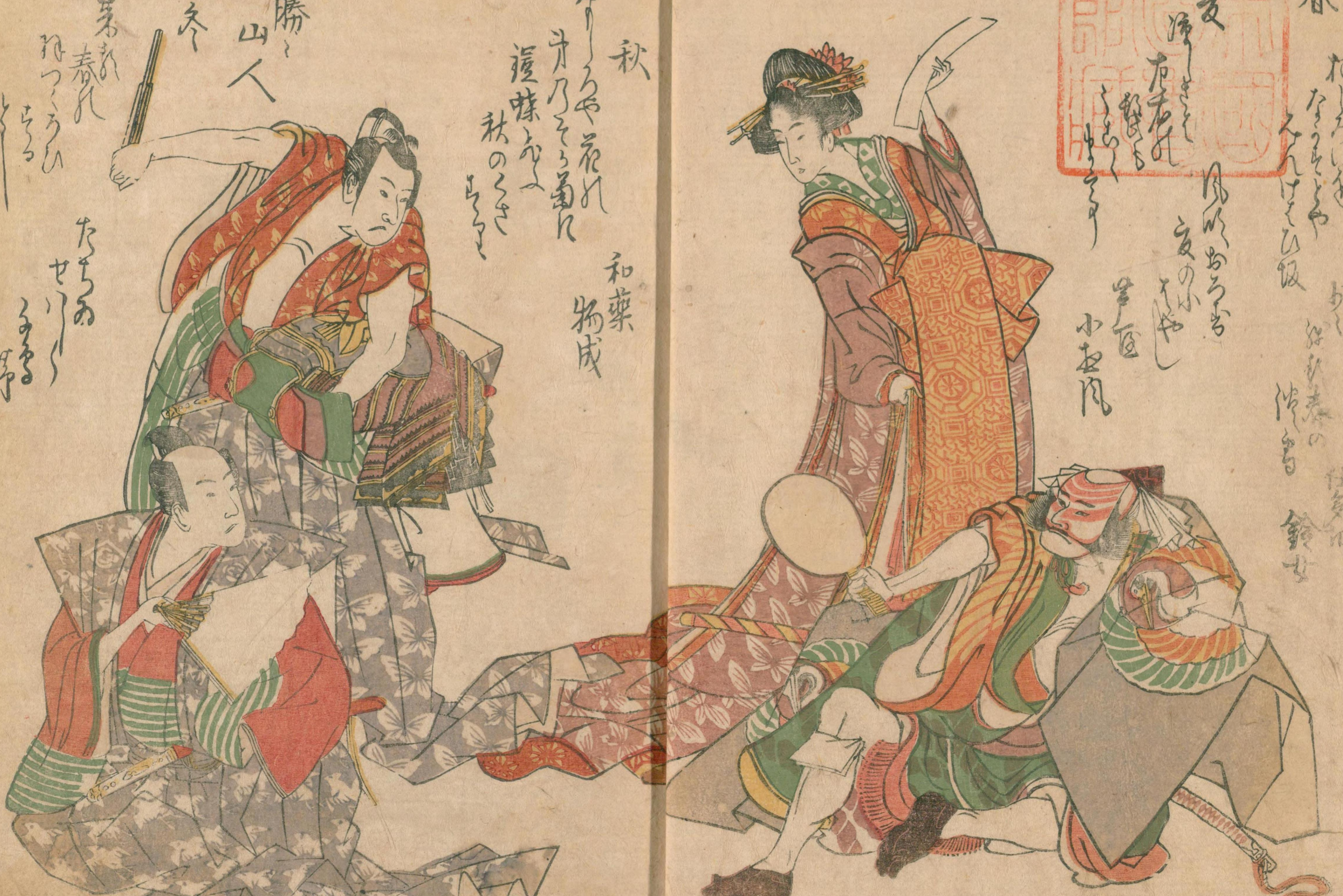
和薬
物成

勝ゝ
山人

冬

来ぬ春れ
羽つくろひ
ちる
とし
そのまれ

たちのあ
せりく
そのまる
時
なら



ガラス使用

雪　奴等斎佐十

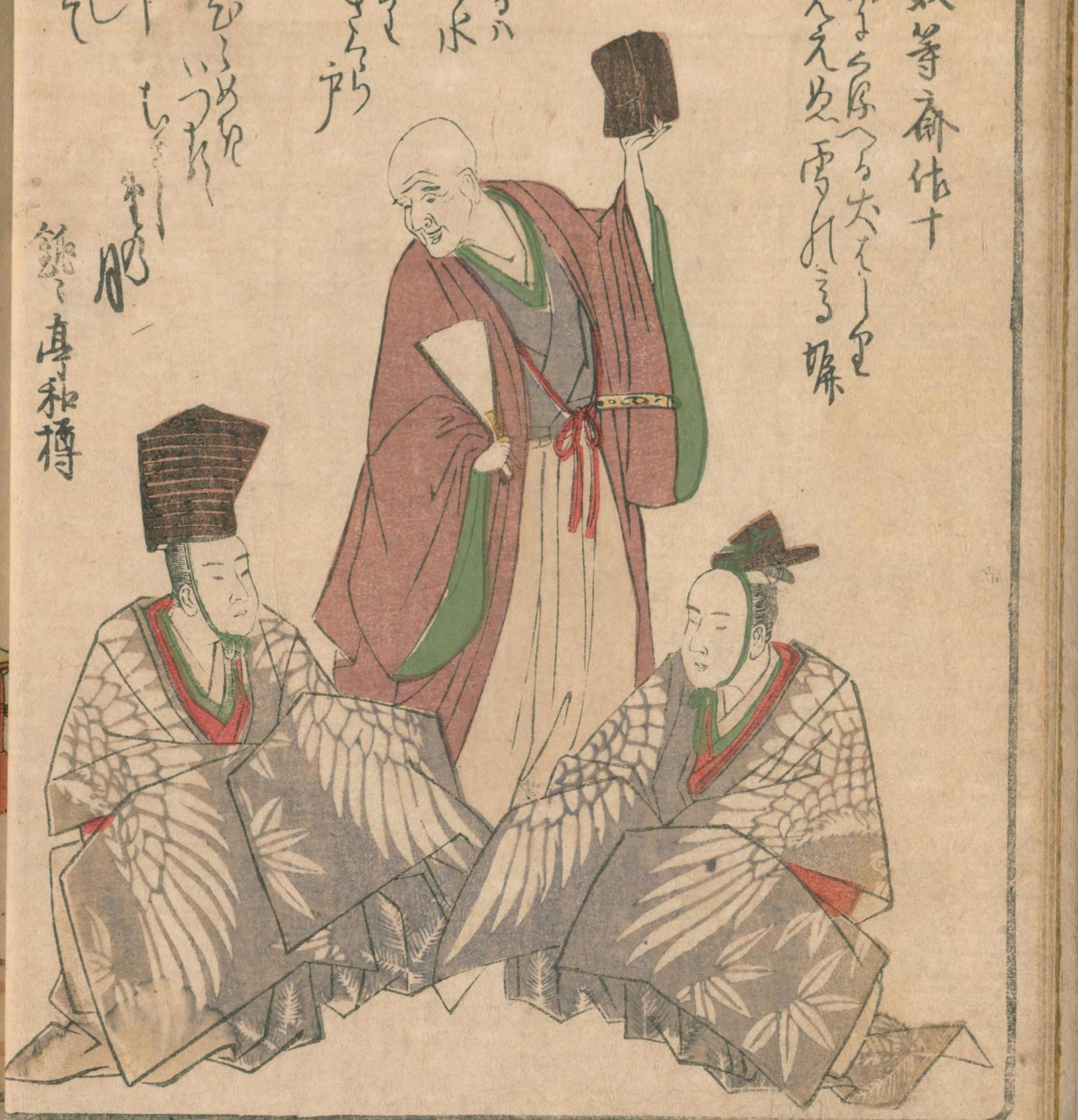
吹まくは風よふ原へる犬そくし里
めつらしもそえぬ雪れる嫁

花
千秋庵
三陀羅法師

をとも今
さのうにあるハ
深川の水
たえぬ
ちそうそ
山のさくら戸

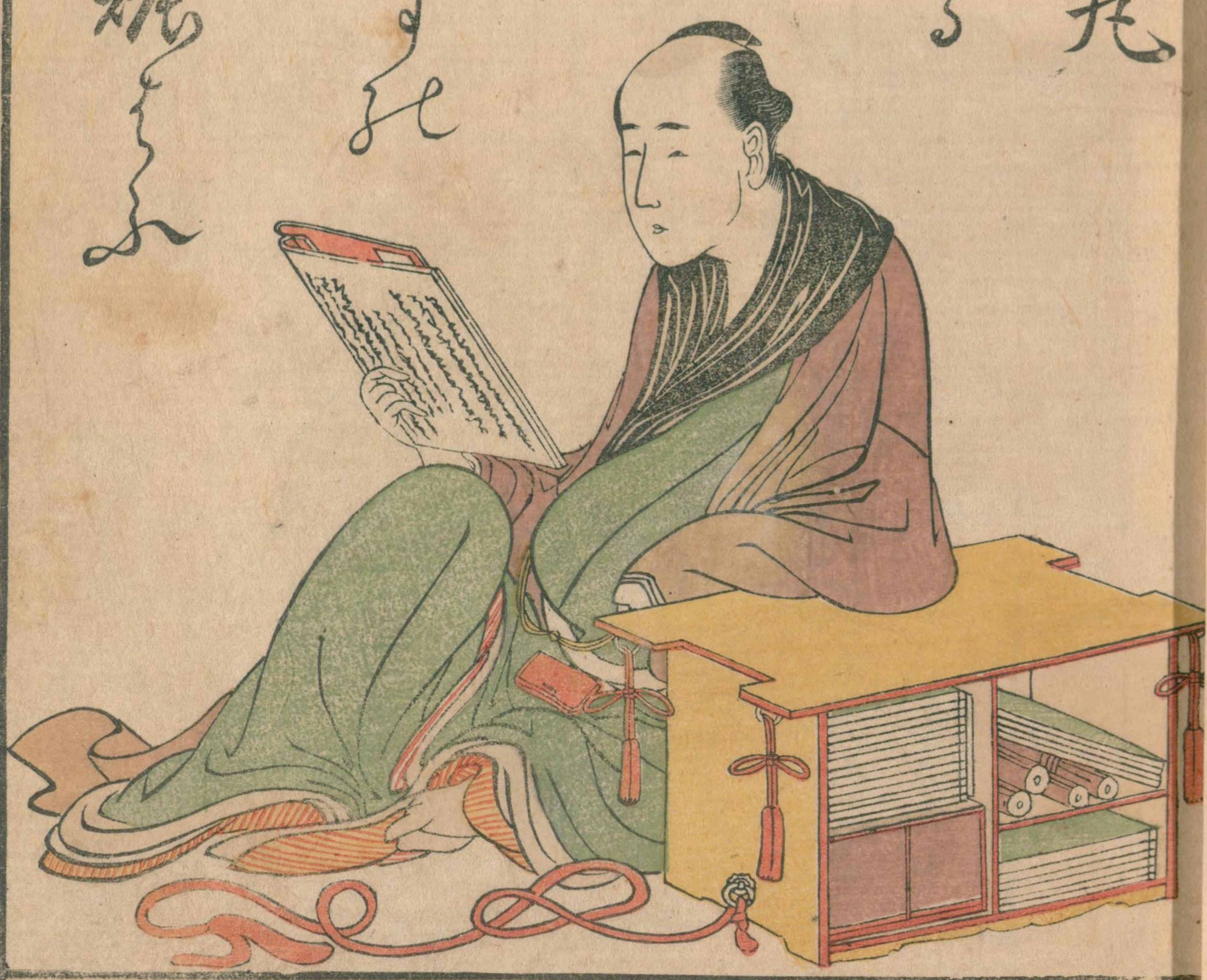
月
秋草の
ちつ原の
新さし
て
むらめき
いつれも
もいとし
[illegible]

鍬々真和樽



屋職堅丸

たてまつる
綾赤ゑい魚乃
献立ハ
なますハ
うゑの
郡驪ゆふ

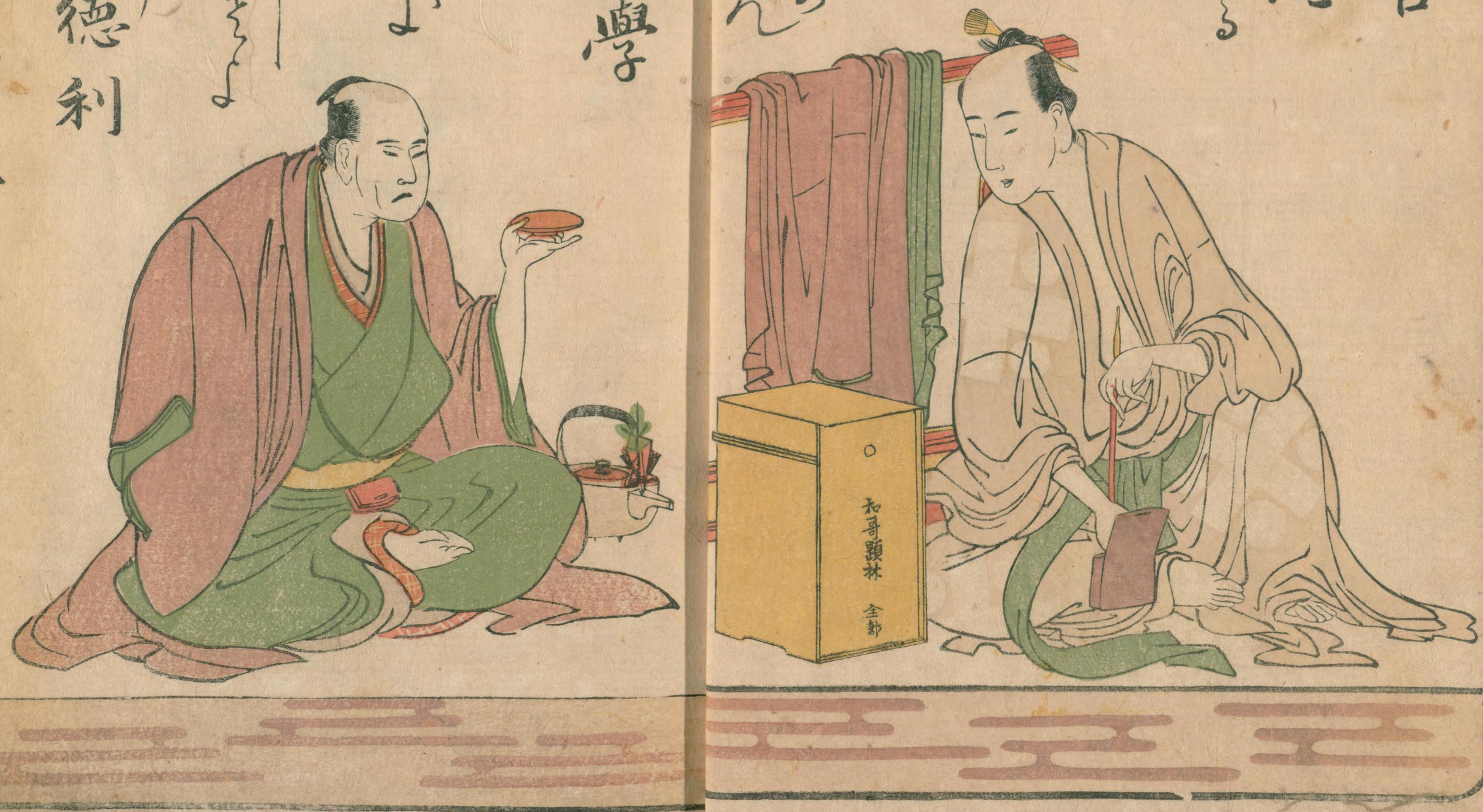


木面吉

六阿弥陀 参る
むこう鉢 桜茶
まづ はつ木
より
咲そめしかん

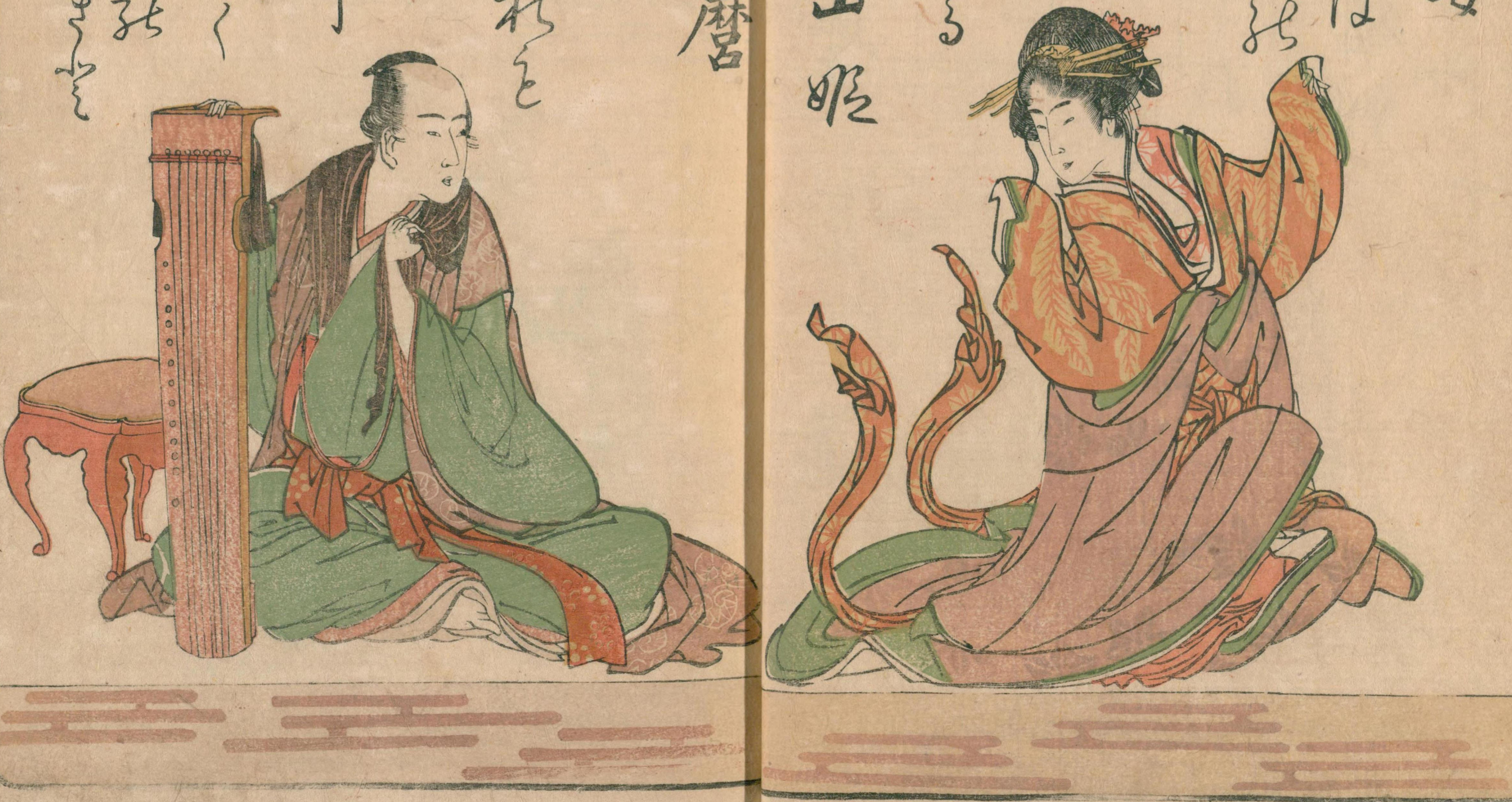
鶴域末學

酒呑と云はれよ
しられよ
ゐのしきよ
一しめ 徳利
みをとも なるぬさくす



松司女
見渡せは菊の
笄柳髪
霜いろよる
秋山姫

富士唐麿
蠟燭の
なかの秋と
思乃
やまるゝろ丁
星と
見る遠く
よし原の
さと

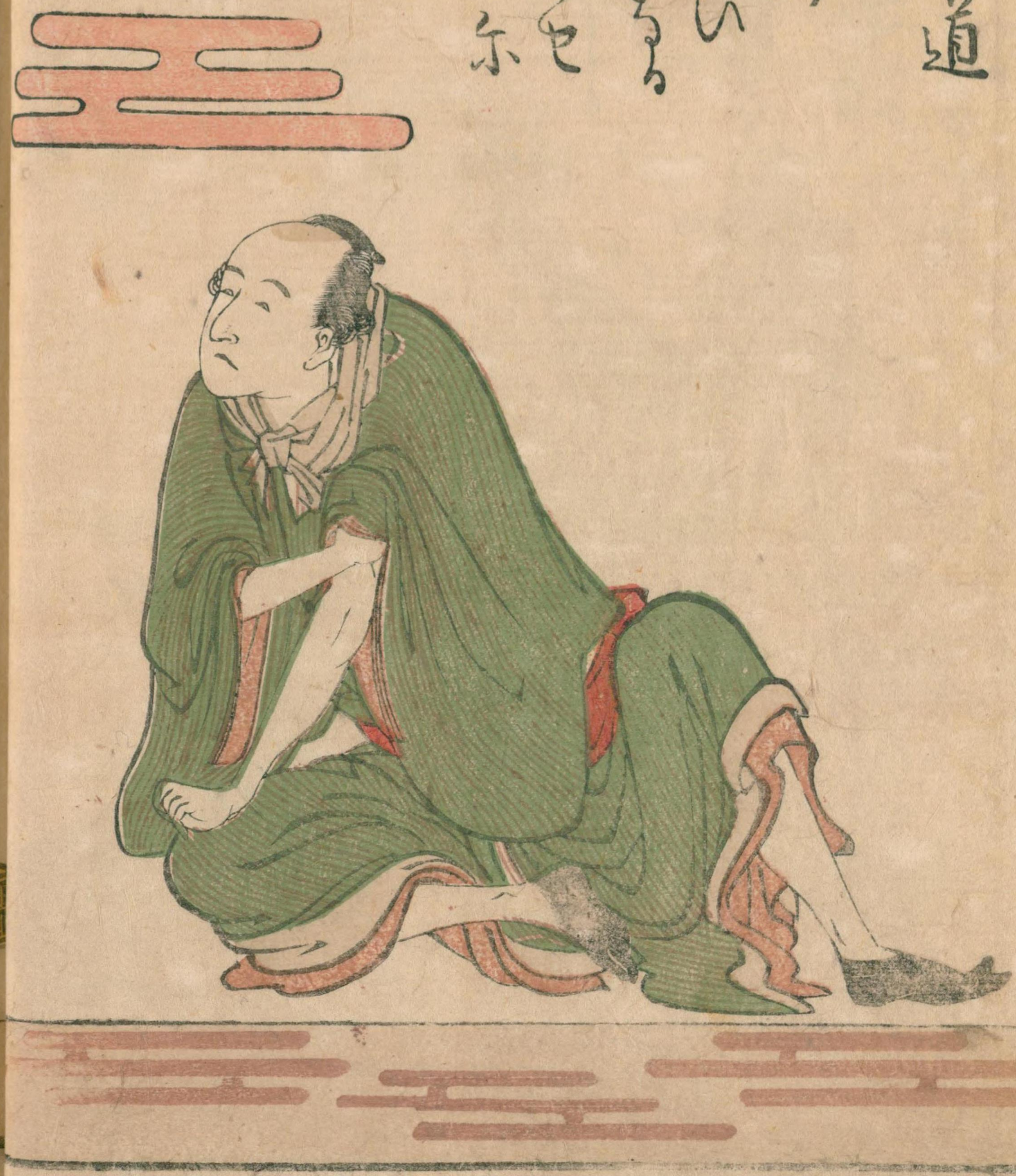


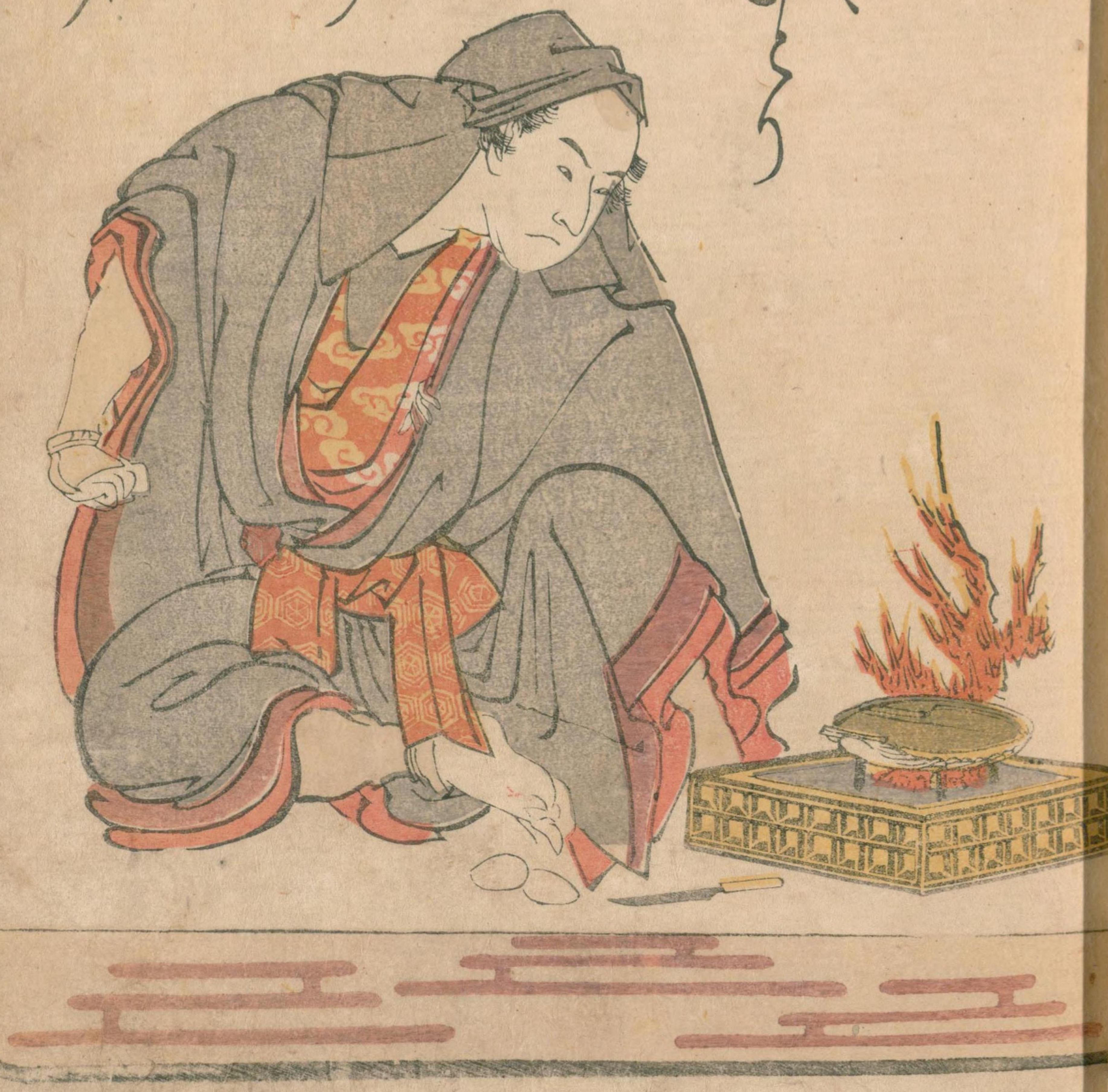
椎業道

かゝ猫は
ねらひ
わとちる
庭のせ尓
嵐も吹
を
ときふる
あ猫
よれ

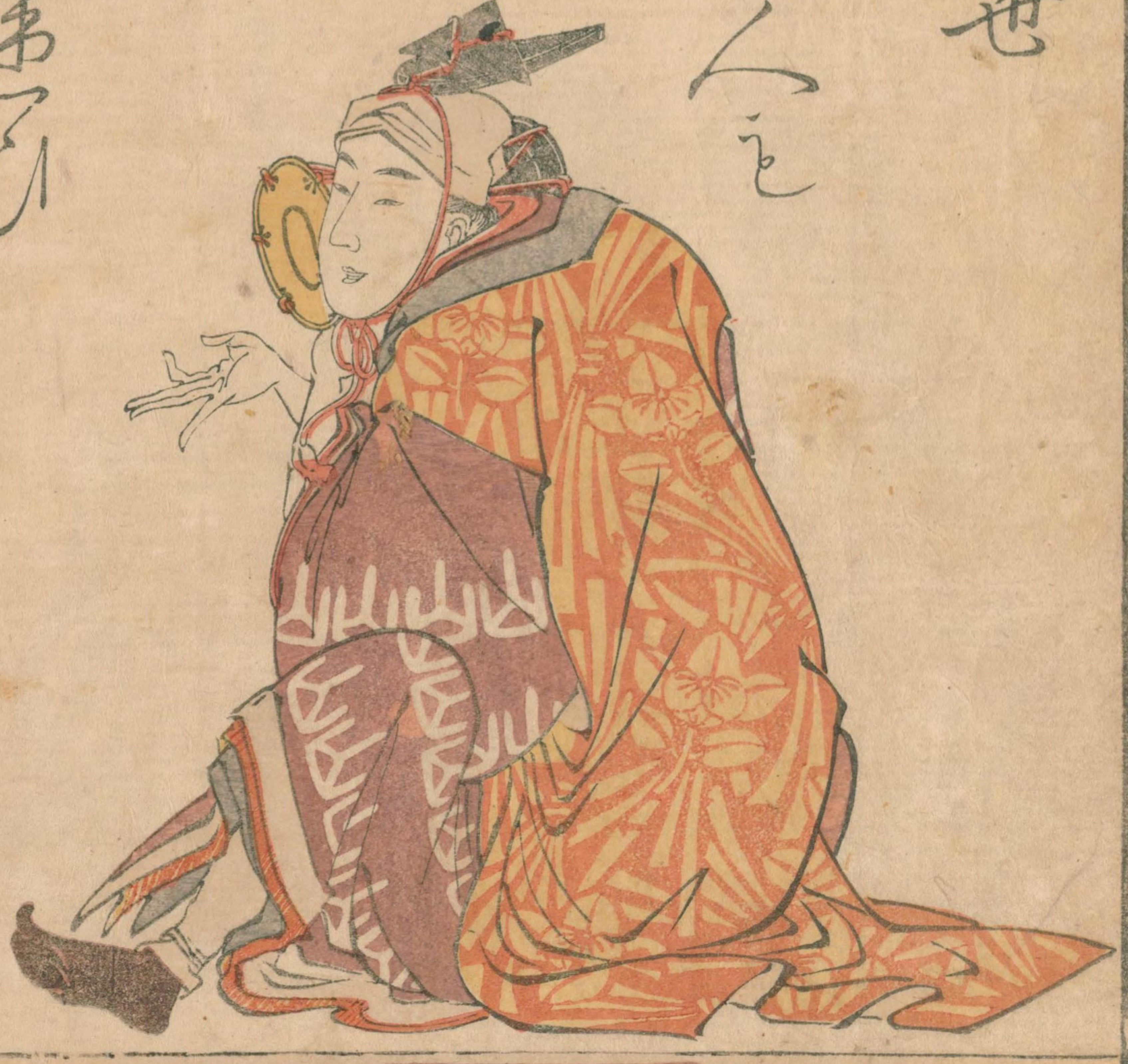
萬石積丸

あくかれて
秋行のり
えくり
折き
ありのり
雪ゝろ
きら紅の
まつ茸
久しき
身

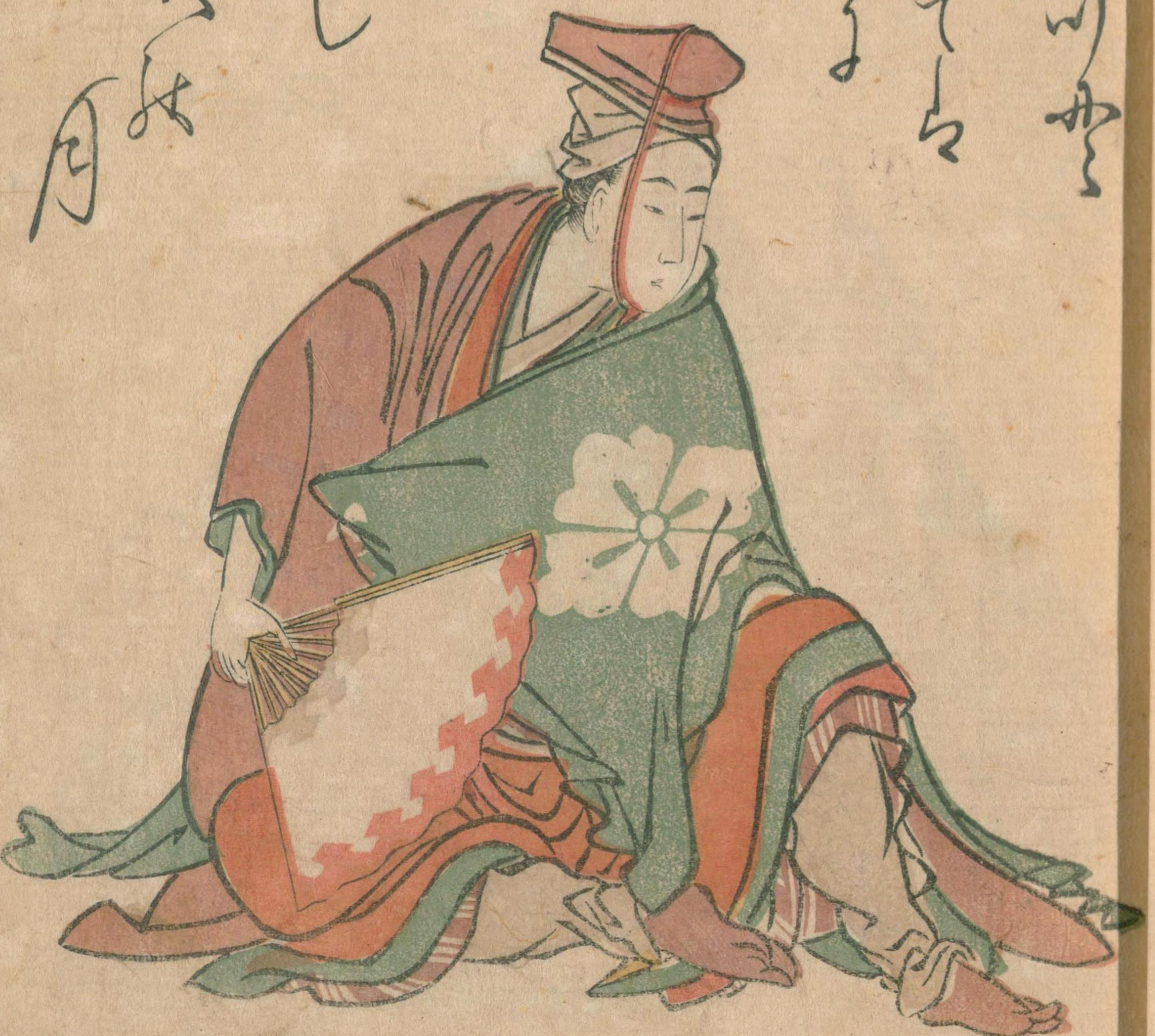




橘床世
たはこのむ三人を
文珠まて
烟り吹
ならふ
智恵孔
輪まとひ

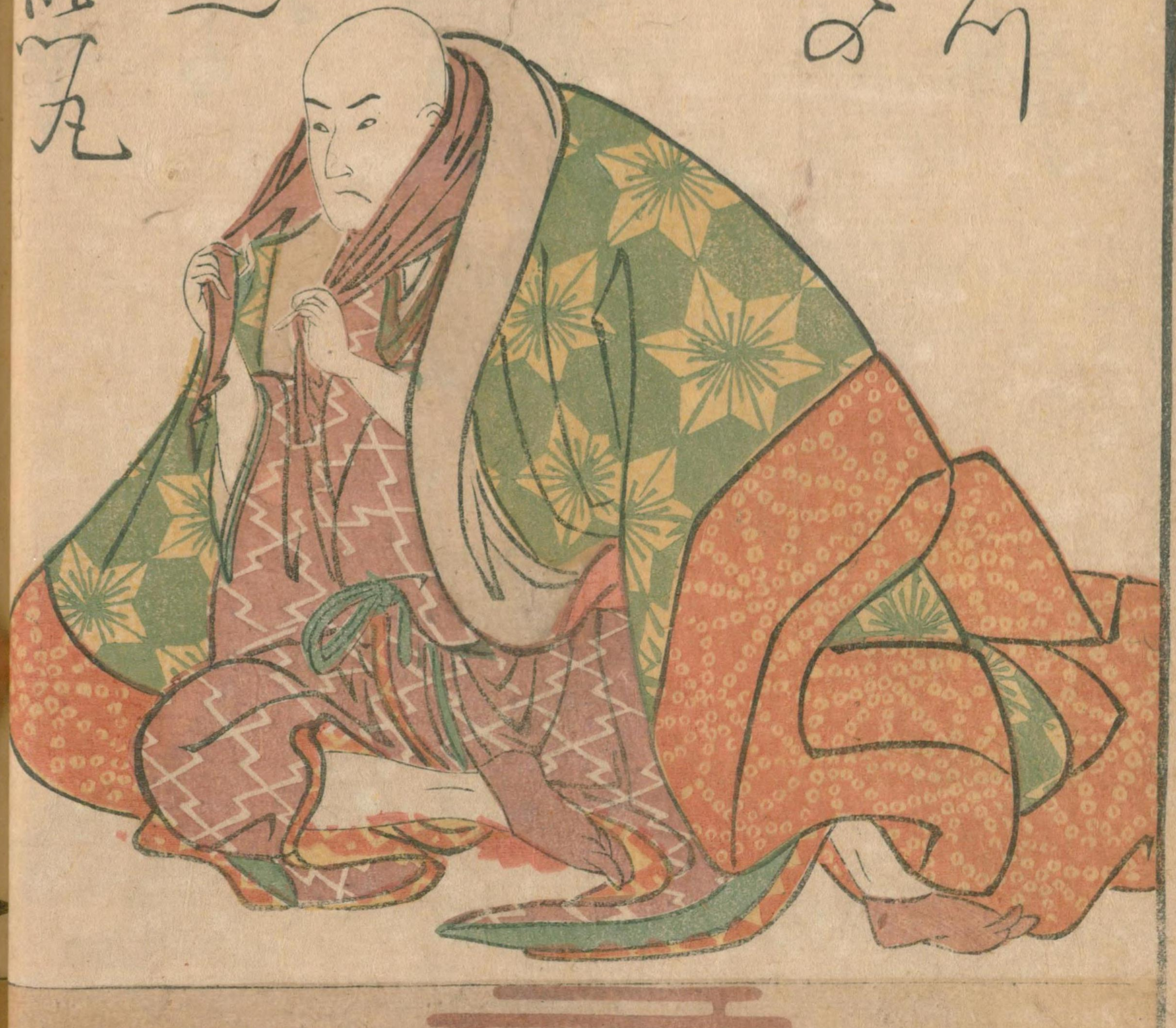


月何雲
くゝ画てら
よきいよよ
やして
きとの江
寸
水きは
ふかし
浮のなみ
月

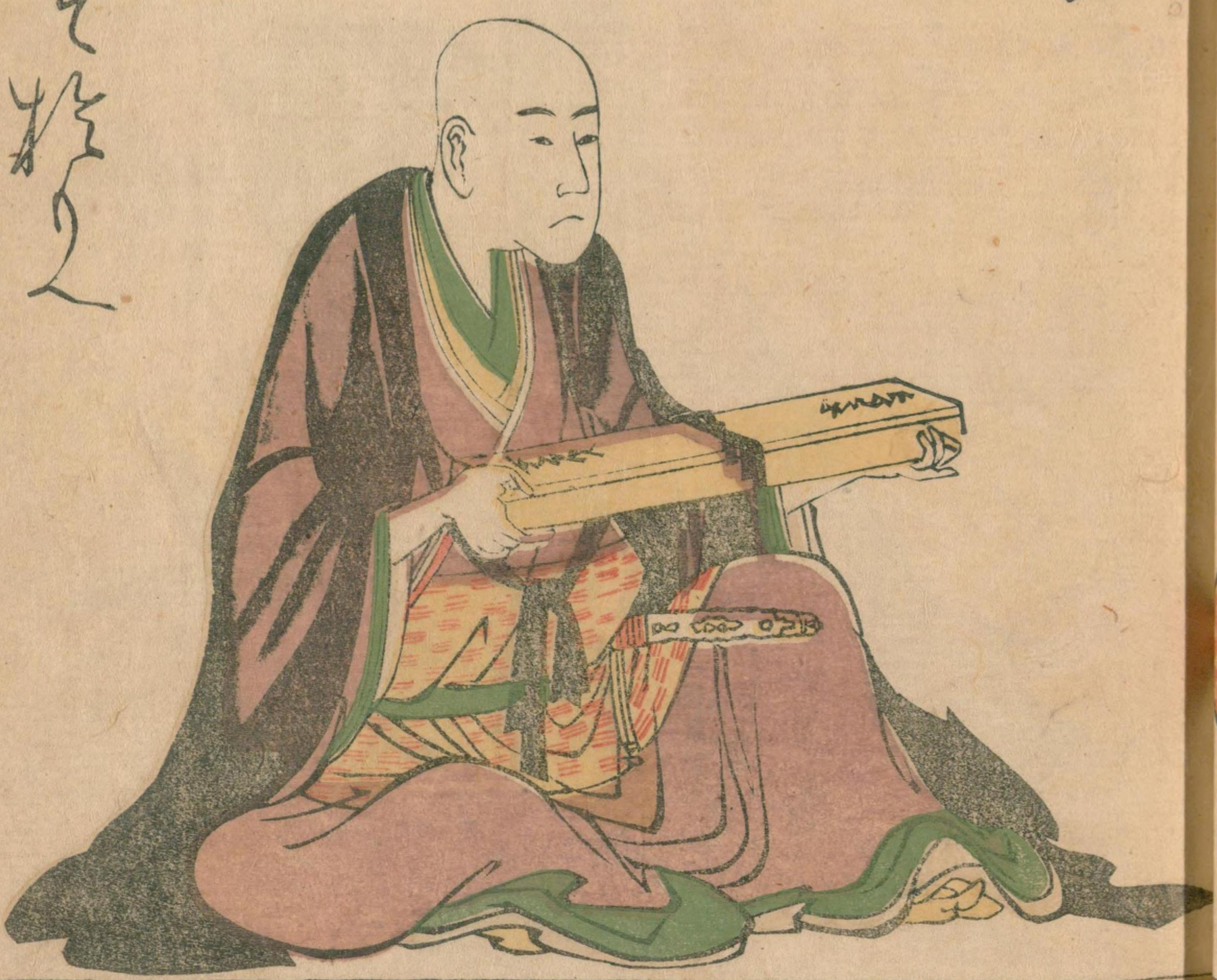


ガラス使用

元日八まん川
吟清三の
三才は
のし
てみとし
なゆりゆへ
朝日照丸

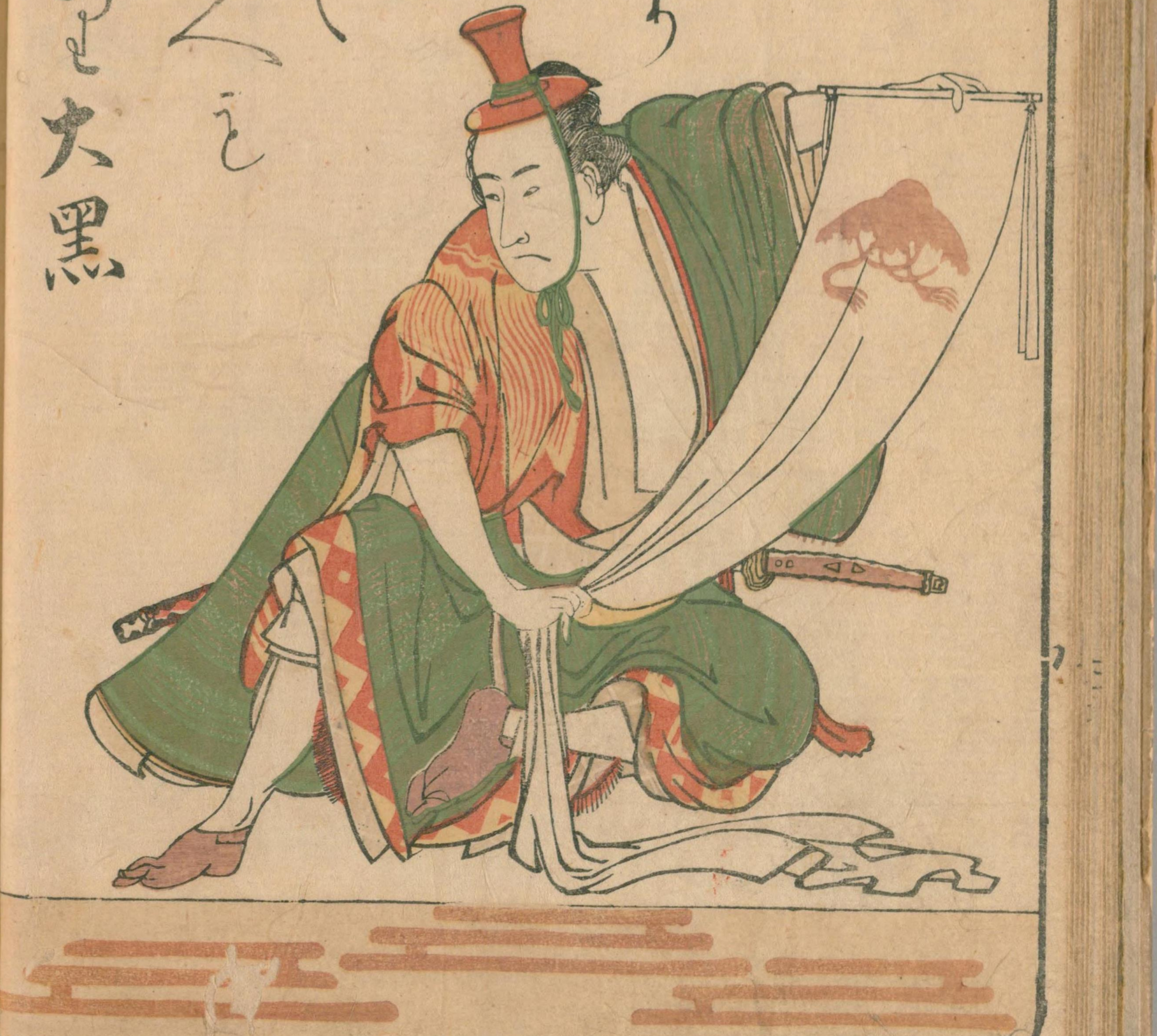


宇治茶筌
きちふゐゝえ
くを醇をし
い茶ちれし
ハ夜へ
かちとし
さけとしそ松りん



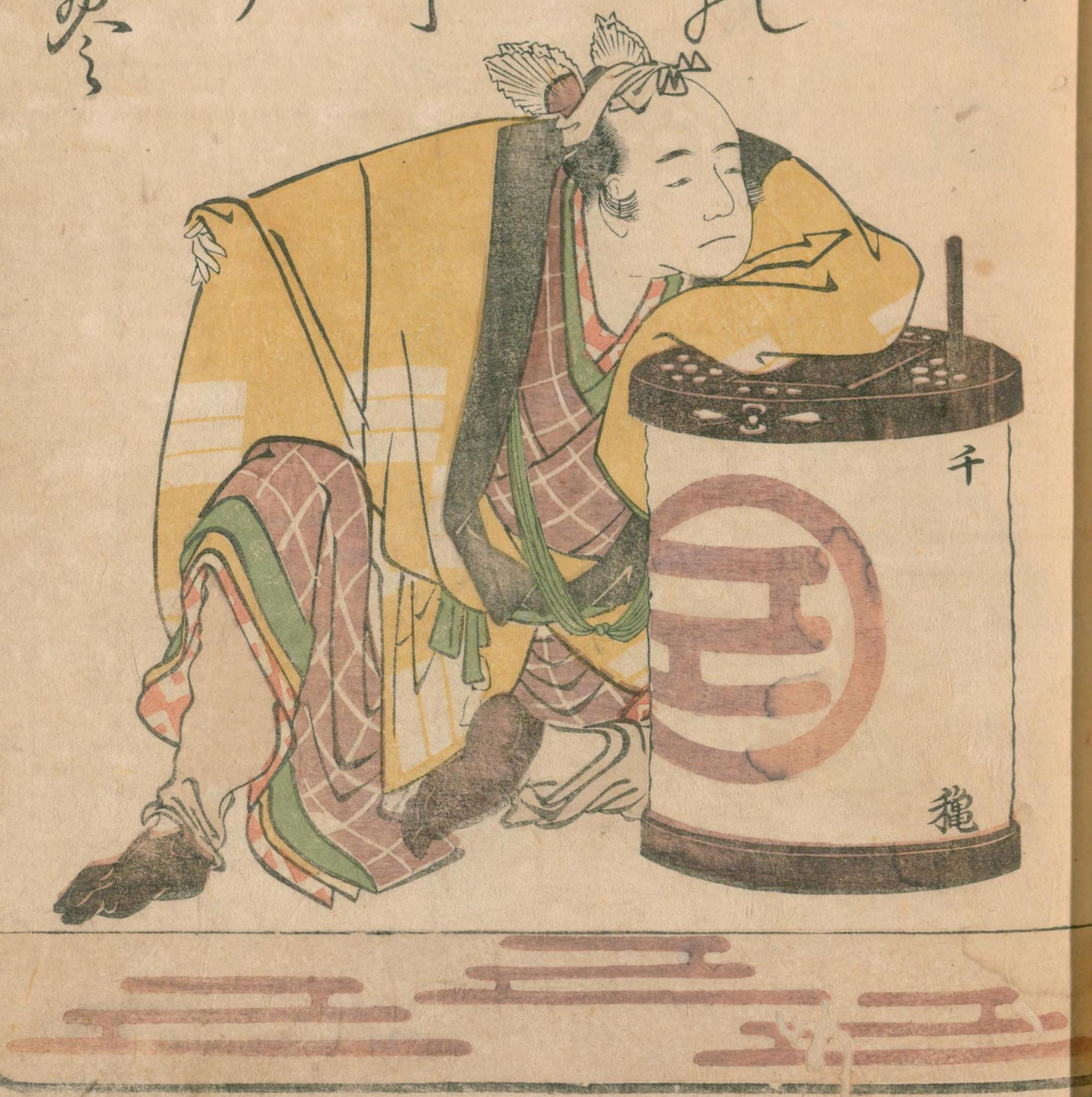
寶褁丸

日光の山より
いつる夕立に
打たれて人を
はしらせ大黒



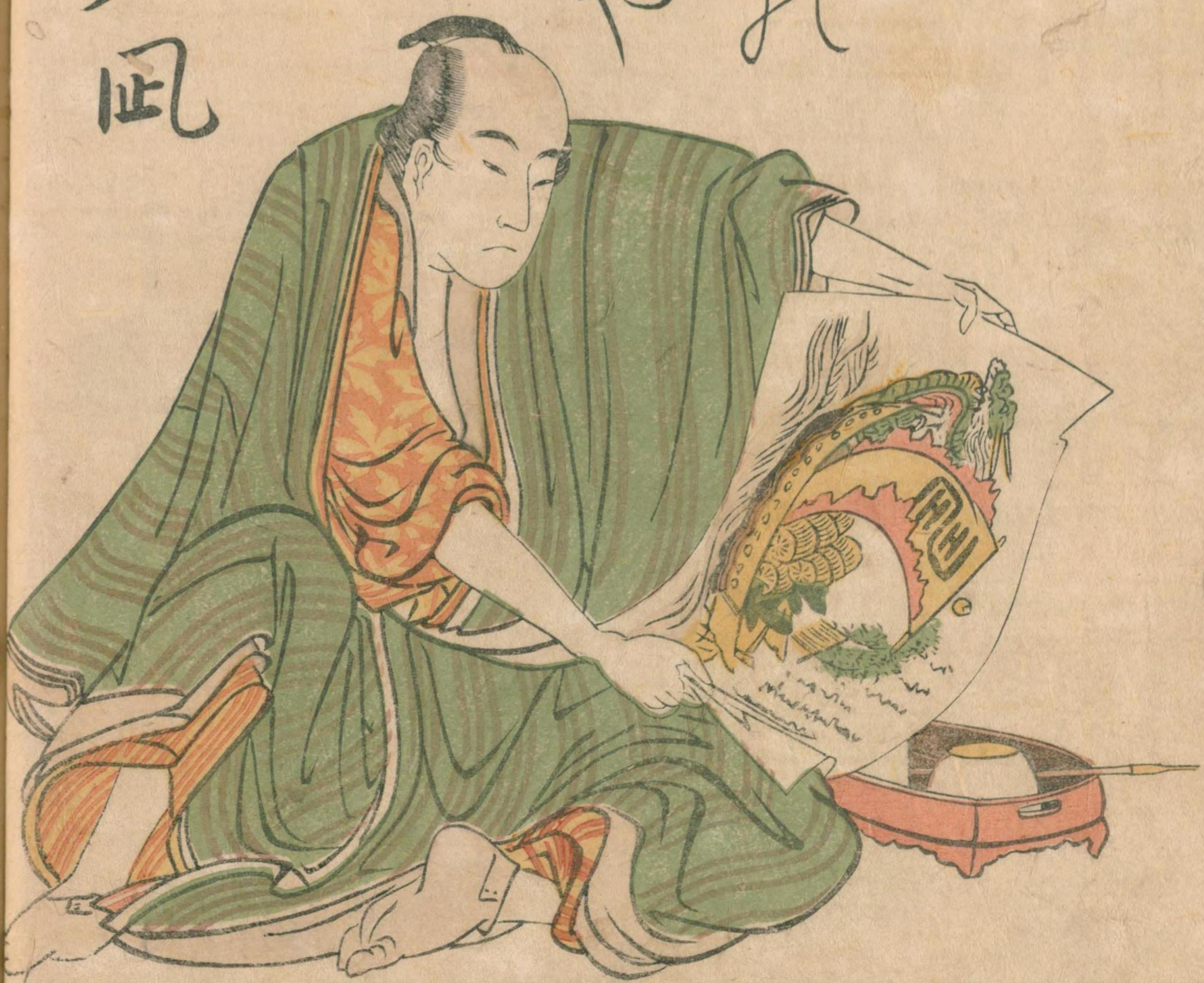
五三桐保

十二文を
くるまをしれ
小野乃
こま子に
あるいは
さるしより
いのるまて
大夢



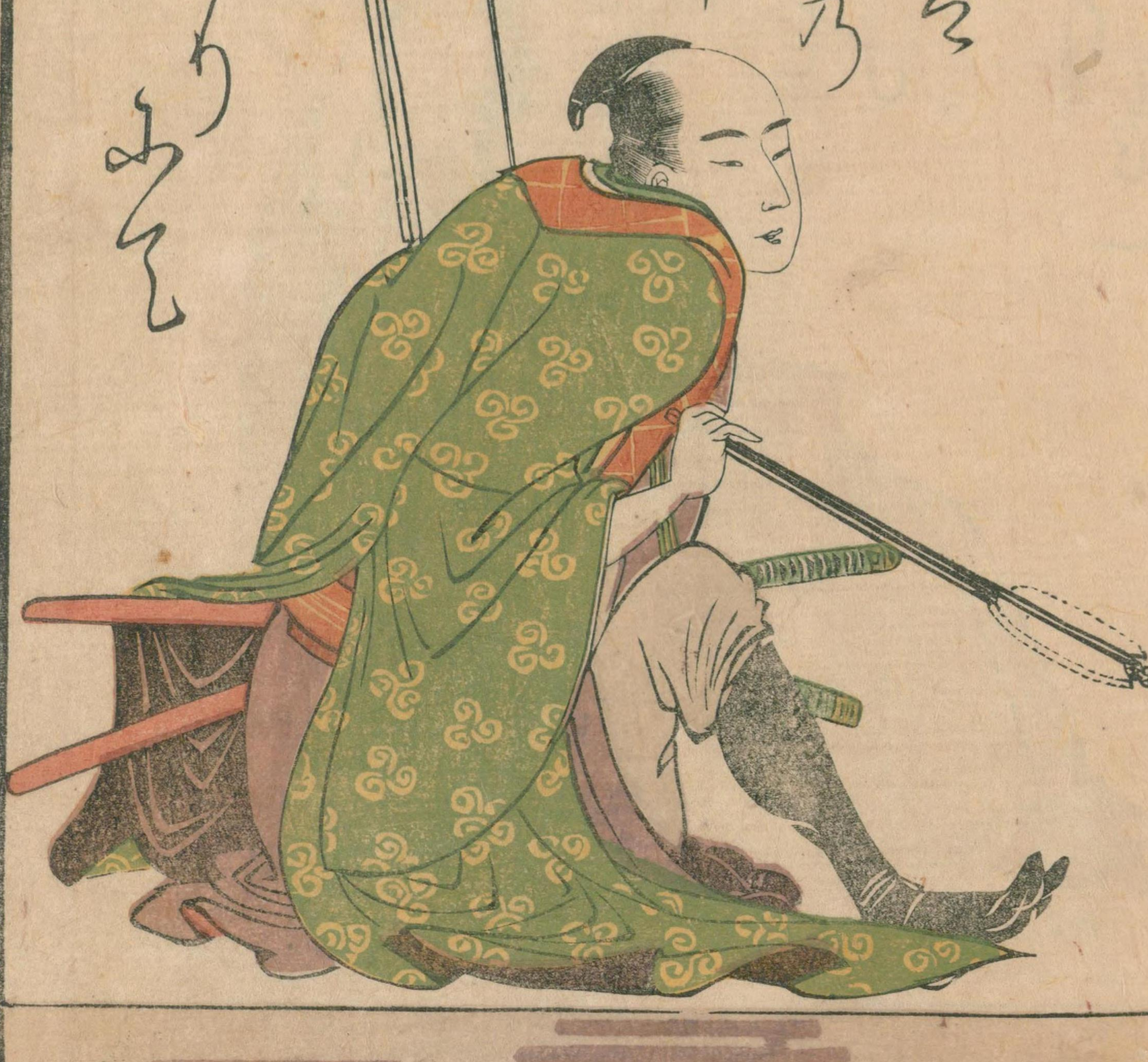
網代守人

竈らやまれ
蚫の貝れ
かくらくや
釜山海
まても
見ゆる
夕凪



煙亭奴成

まろしさまに
崇ふ扇乃
風の神
脊中よ
銭
つる
そのり
めて



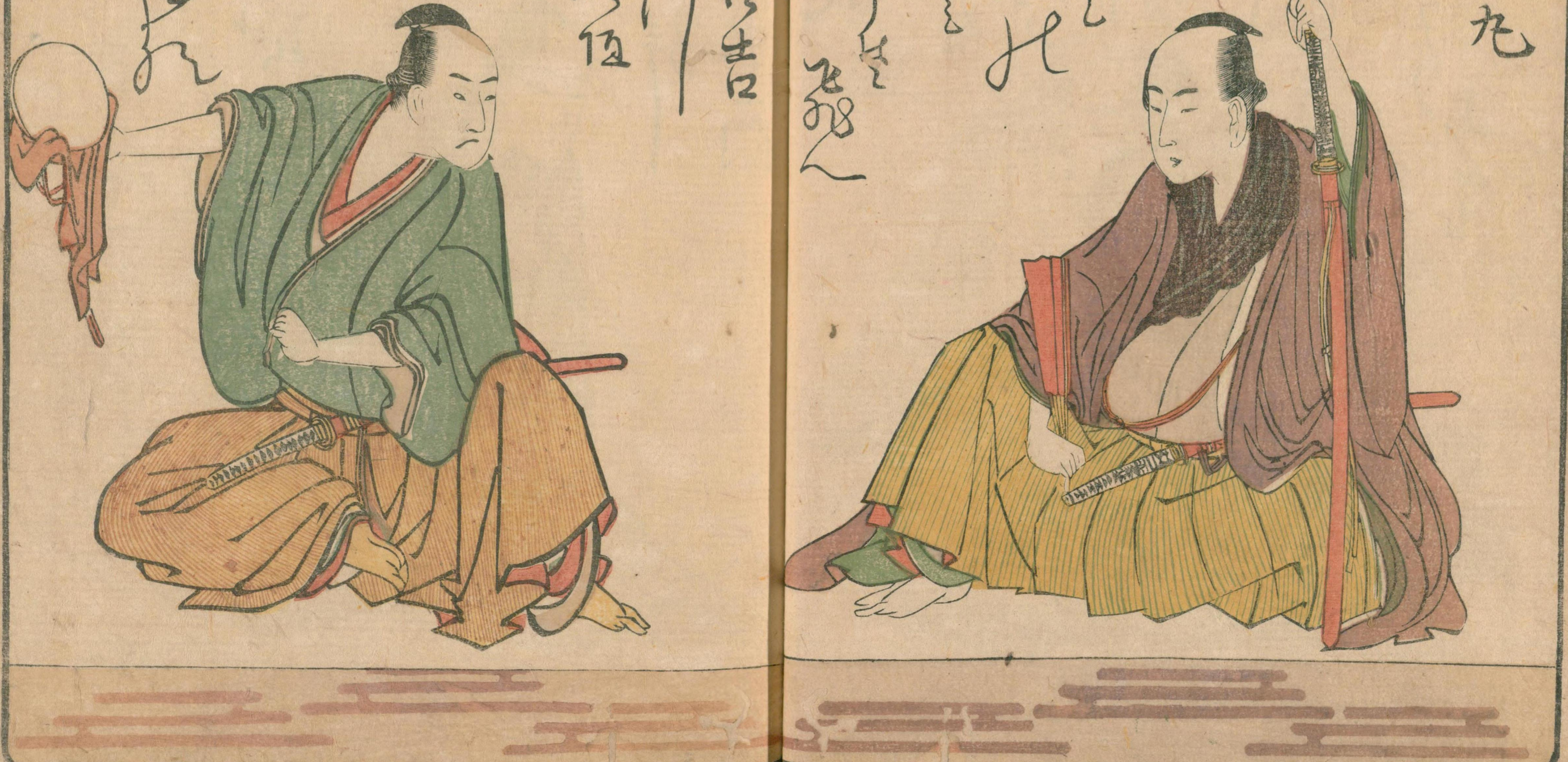
ガラス使用

花衣根九

若き者も
さすか袷から
うつりとそ
芳れ
かるくなるを
甚之しきを
飛ん

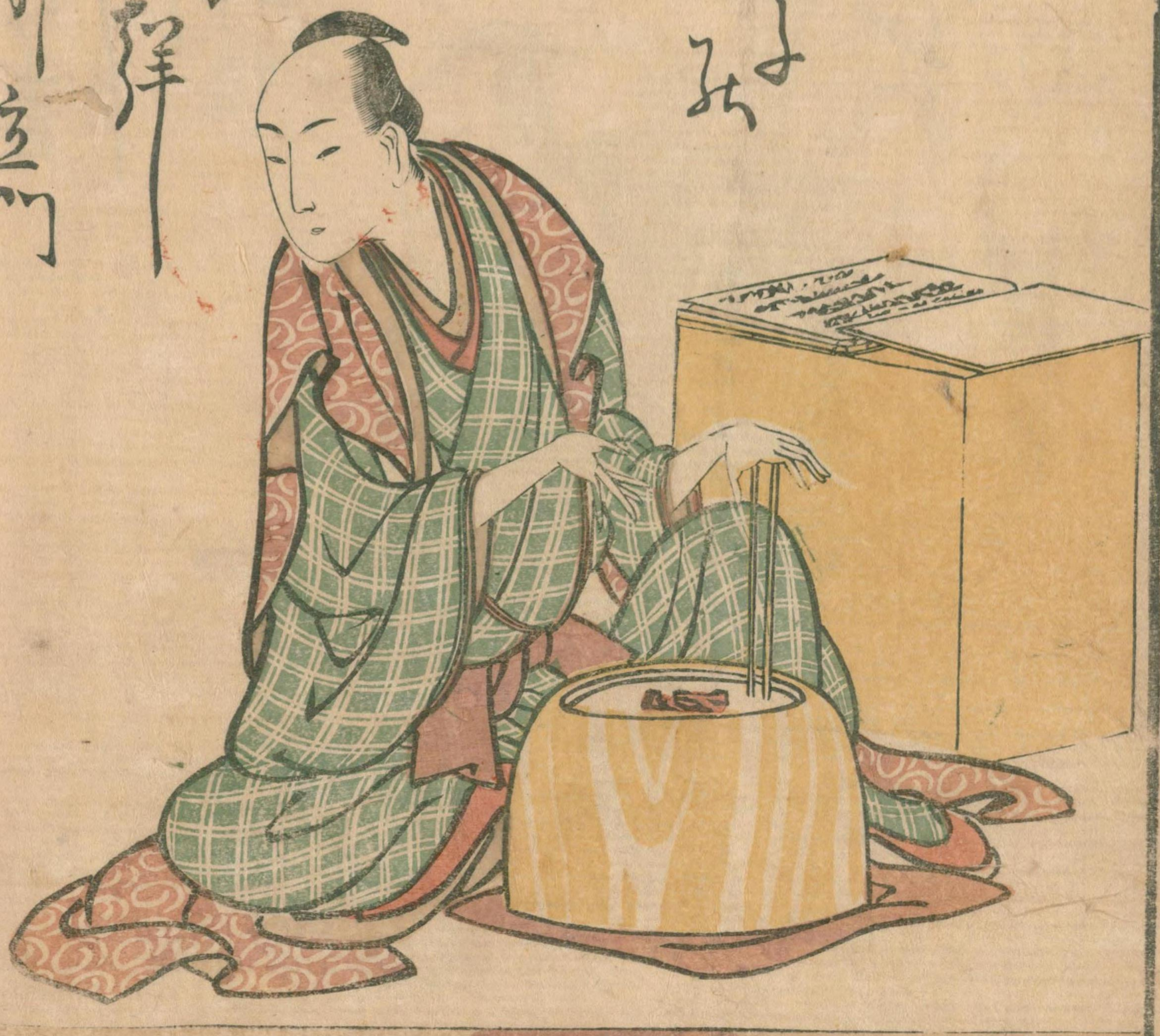
栢占吉

好まかり
庭の若稲
野ぶして
あつし
ころもは
えましし
と
ちれ



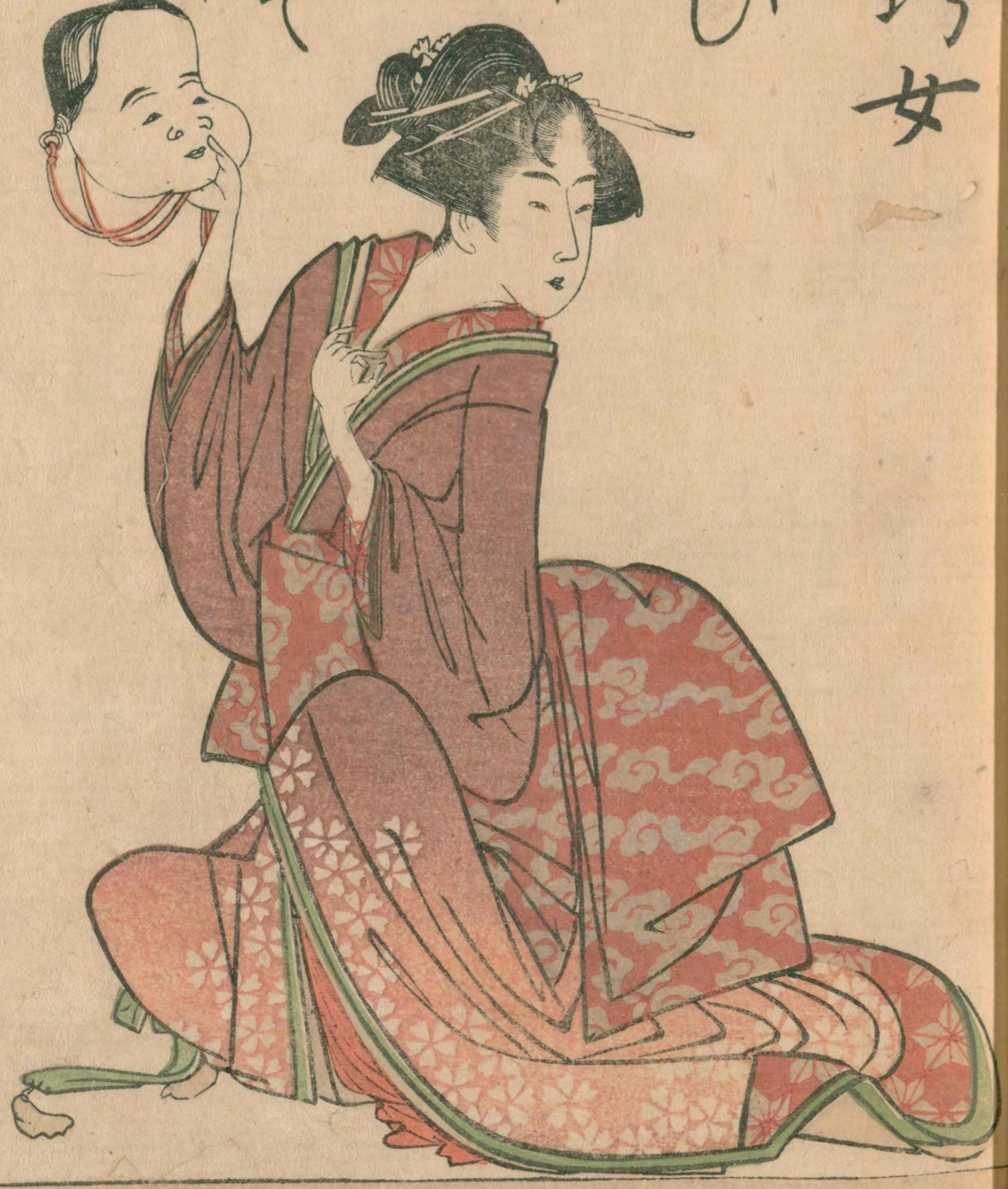
雪まえゐ
中よの傍のよみ
あるきかけり
そるとそ
さらまされ
筆の拝

香御立門



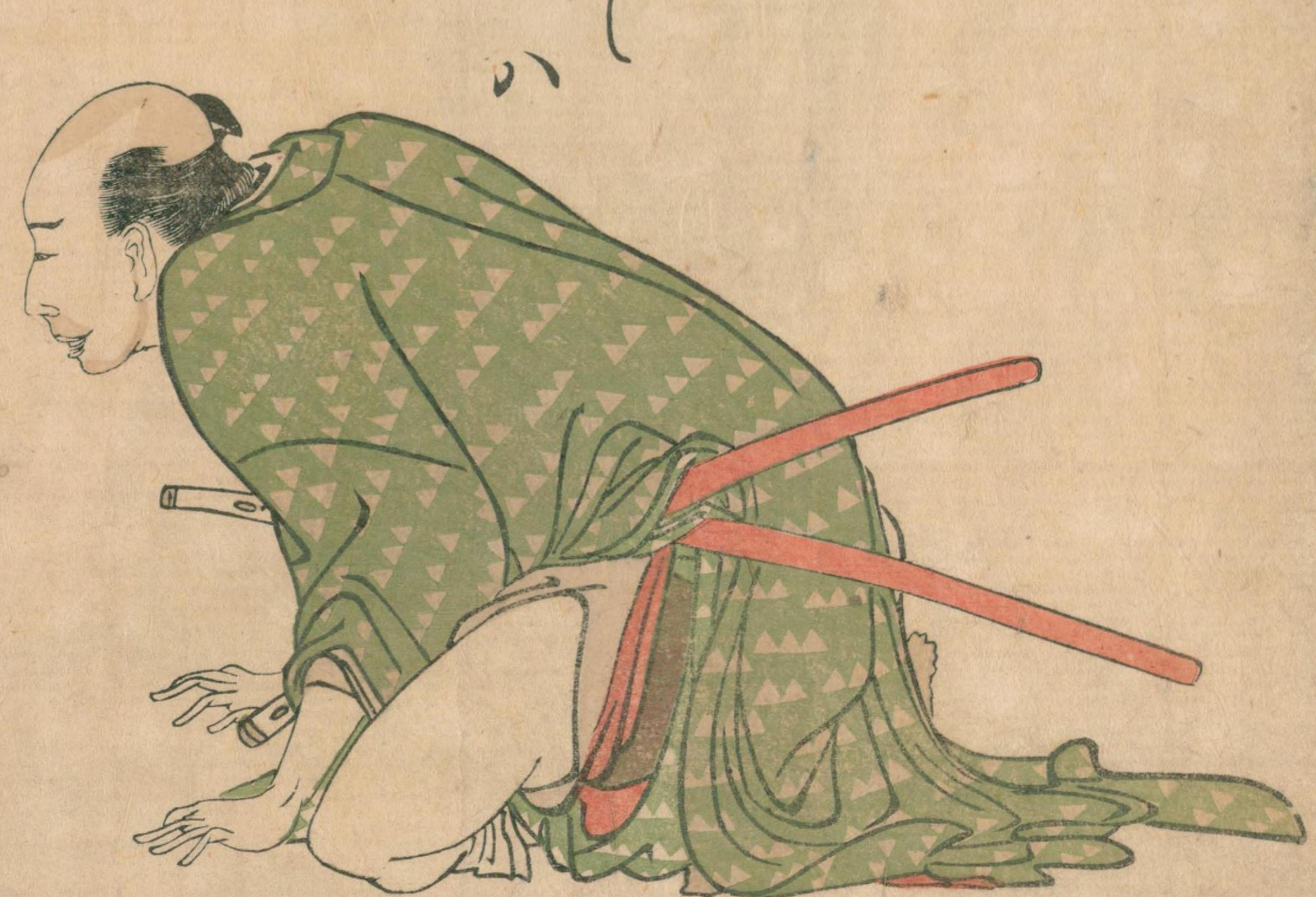
庵利鍔女

娵と召ひ
さゝめし
手綱乃
ゆるまそてや
ちゝ渡比
駒そ
君よ
ひかるゝ



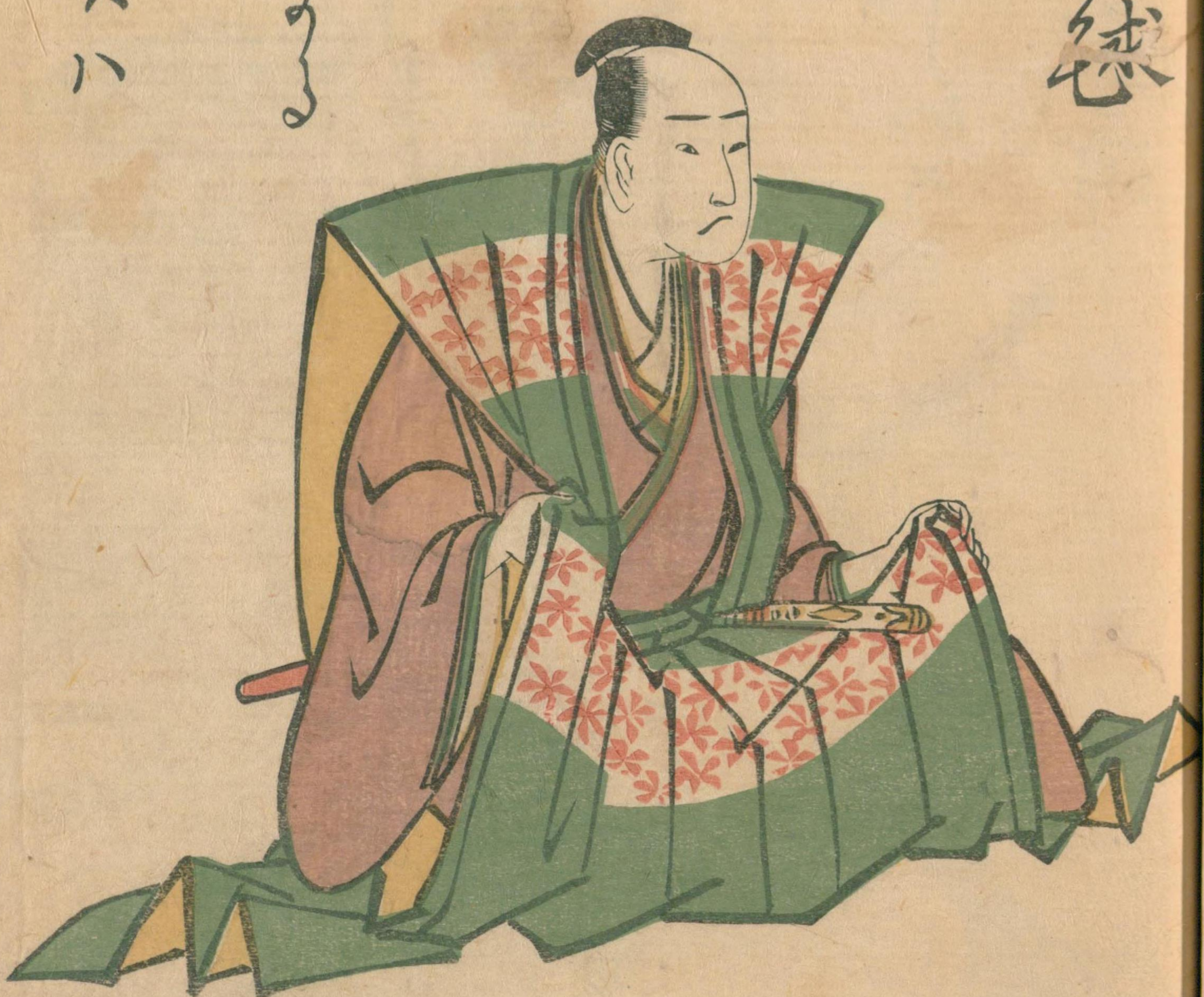
銚子濱人

水にすむ
蛙に歌を
よまれては
かへしもならぬ
春の
荒小田



緑松総

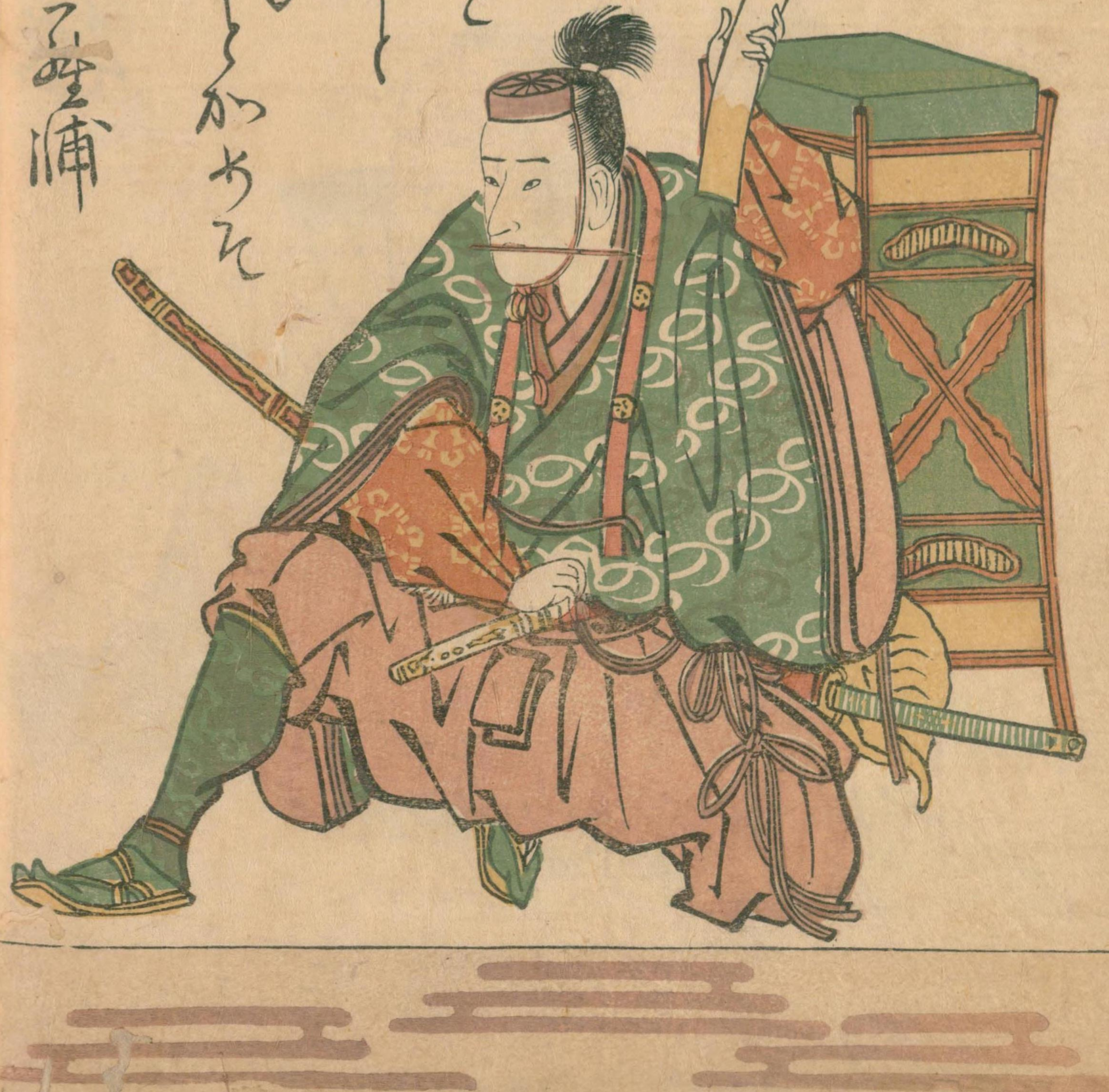
手作りの
月のうさきの
毛絲のころし
本織色なる
こゝろも
う何安ハ



ガラス使用

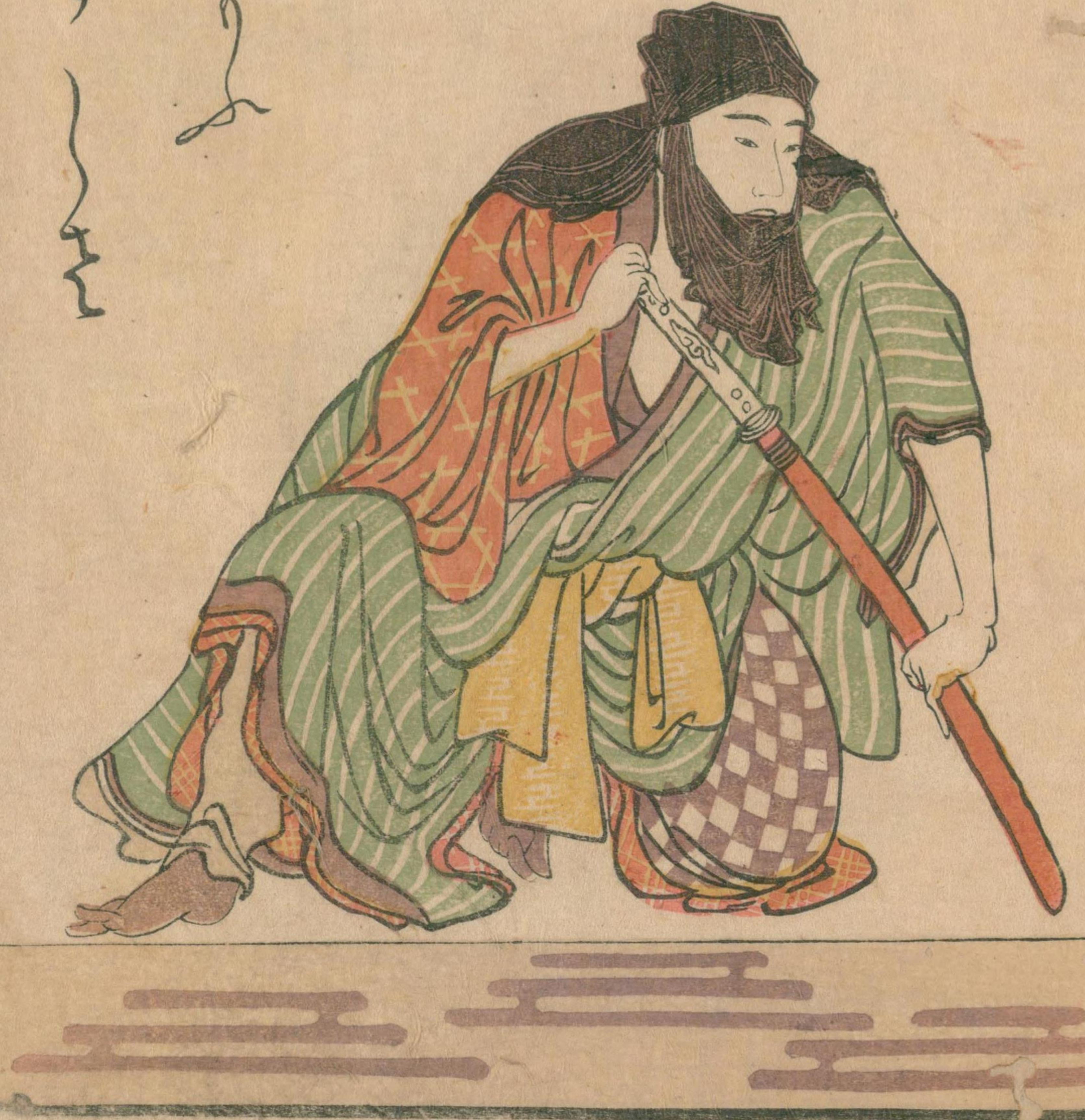
こゝろよく
きしは
みてめる
乗歌を
ふ人相なし
人るとかやそ

大峯恒石野浦



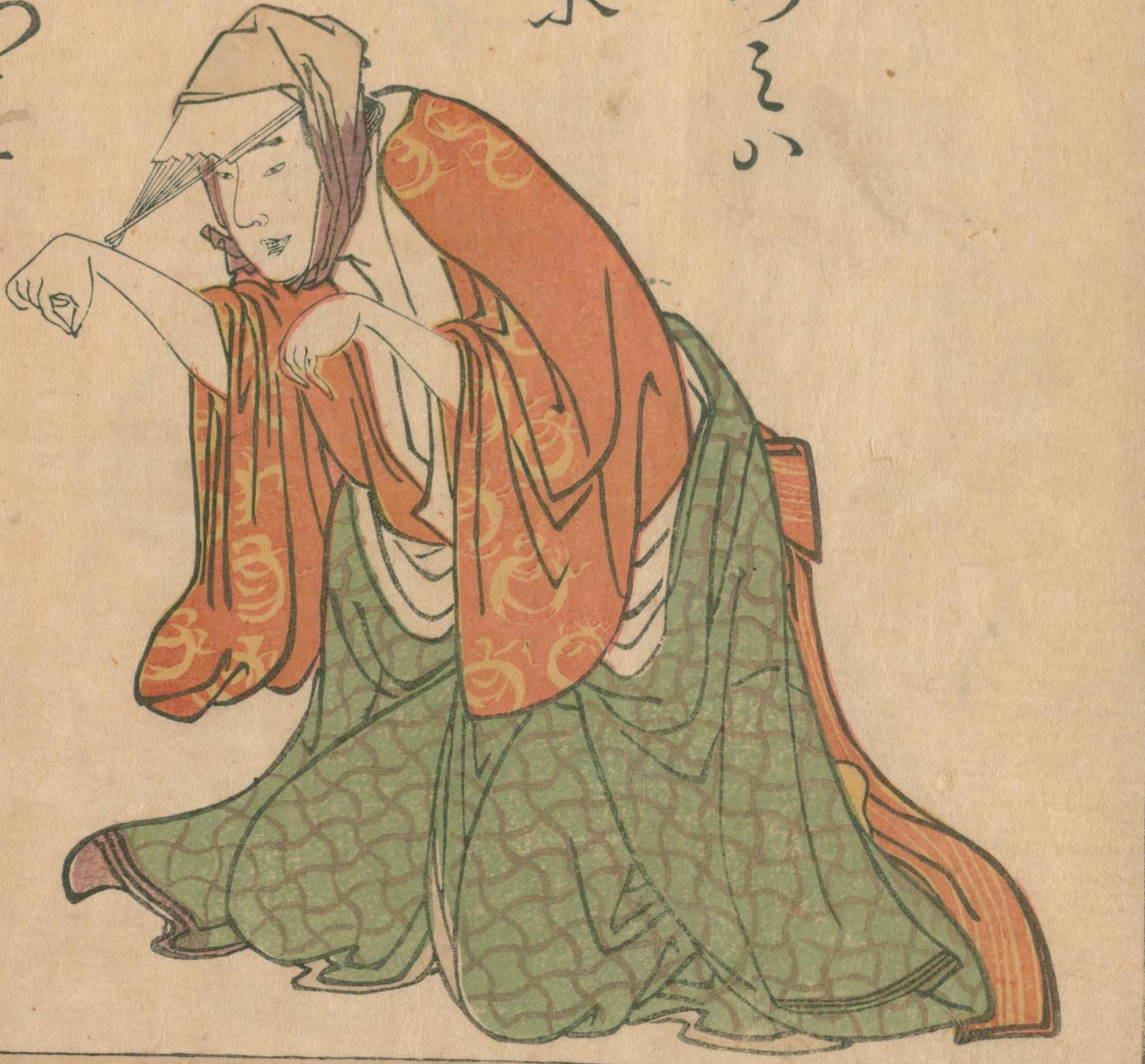
綾松左樹

世をすてん
なまくさもの
玉子
きみとわの
中ふかく
ふかく移りゐ
るしき



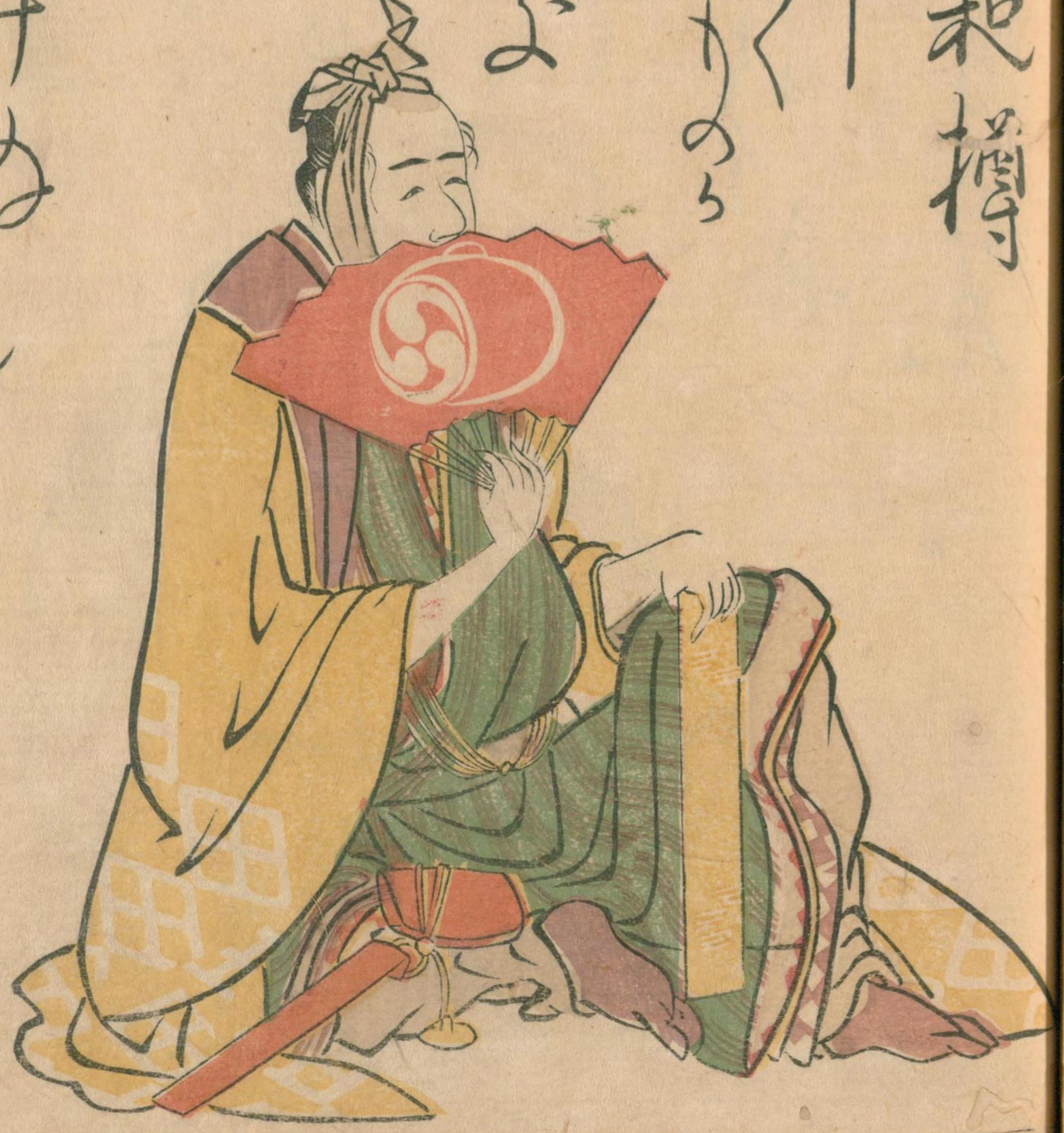
千丈桂

栗柿は
このみは
ぬらす
秋雨に
まくらも
みの山
を
てらしきて
もみちさせし



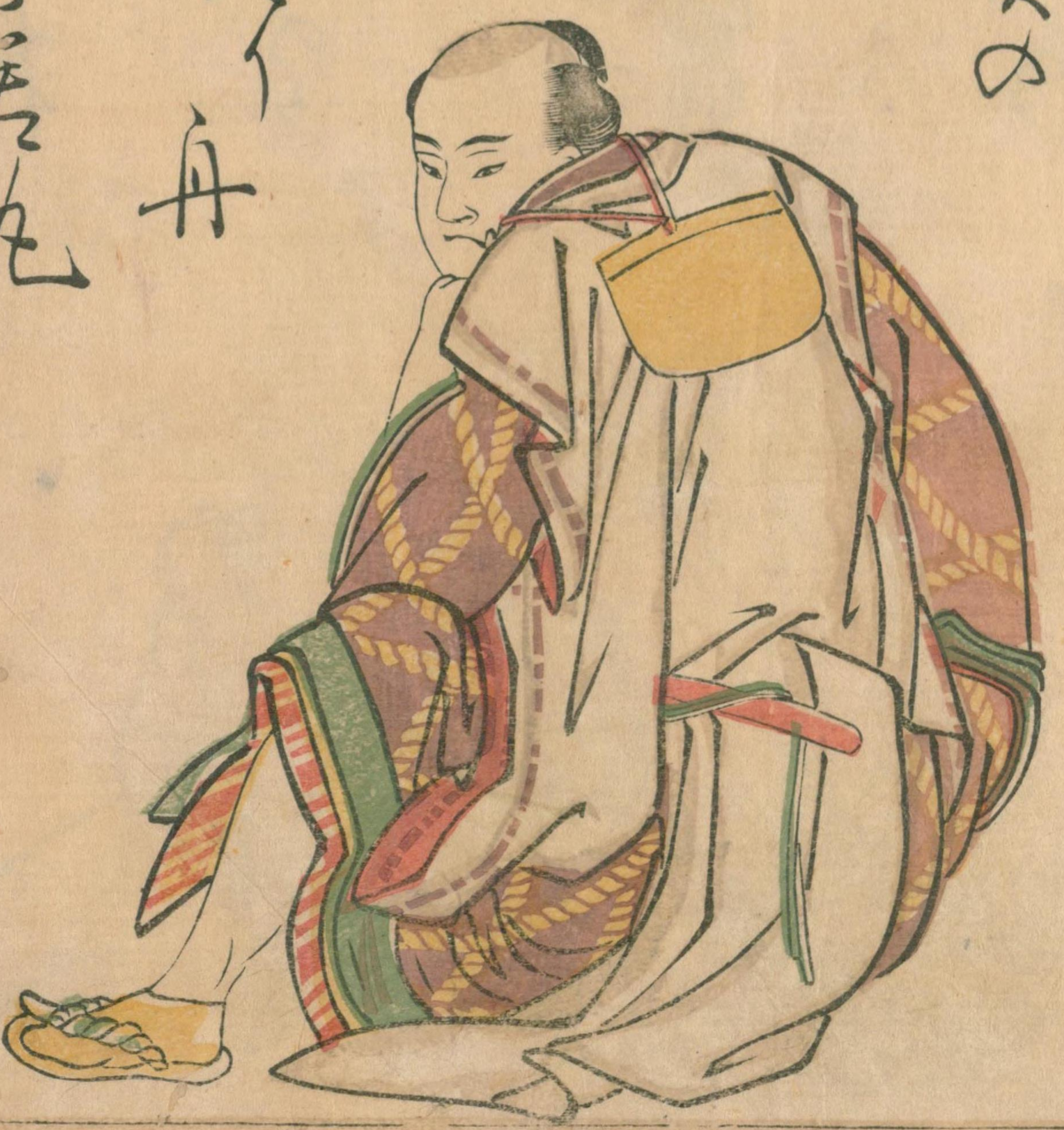
参和樽

紅錦より
いつはたらく
かのら
ほとゝ
ほまよ
池の
氷の
浅く
とけめ
みえし

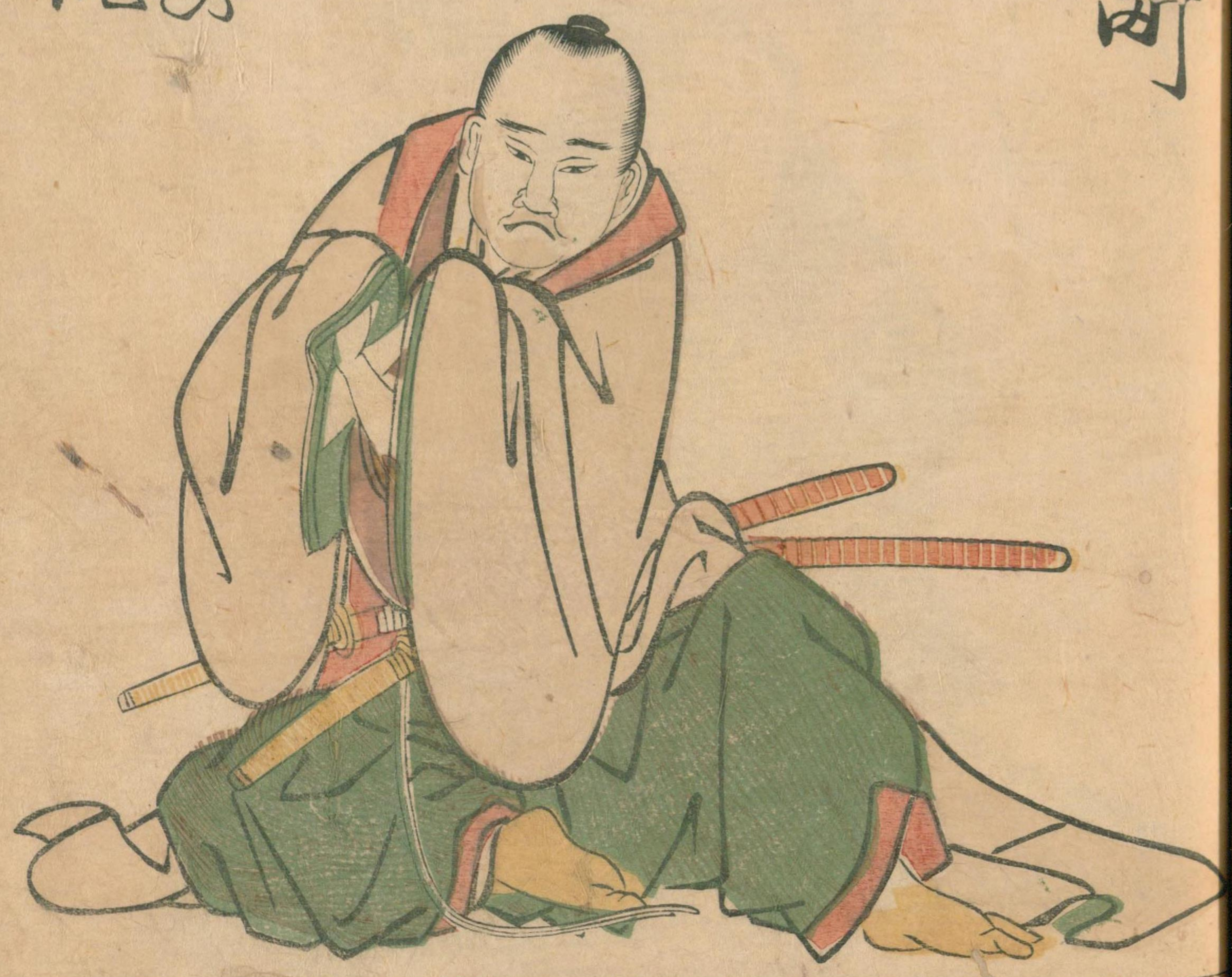


ガラス使用

このまゝる奥の
おかこよ
有明の
つきも
うらみつく
海士の釣り舟
古今若丸

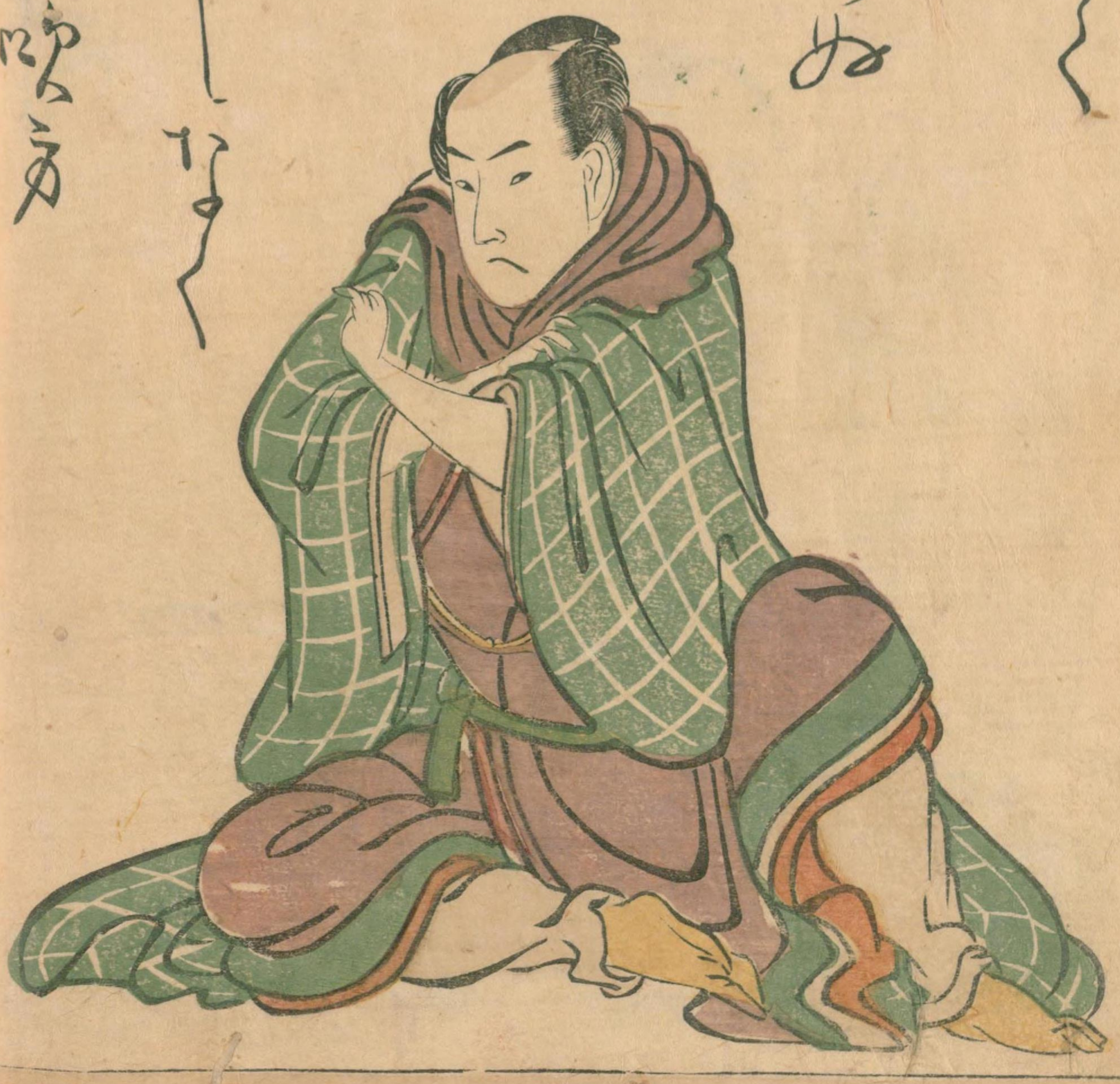


巻一町
人まね似よ
つり
て
見れハ
あまて
りいも
くさり
はもひする
猿はしの
杭



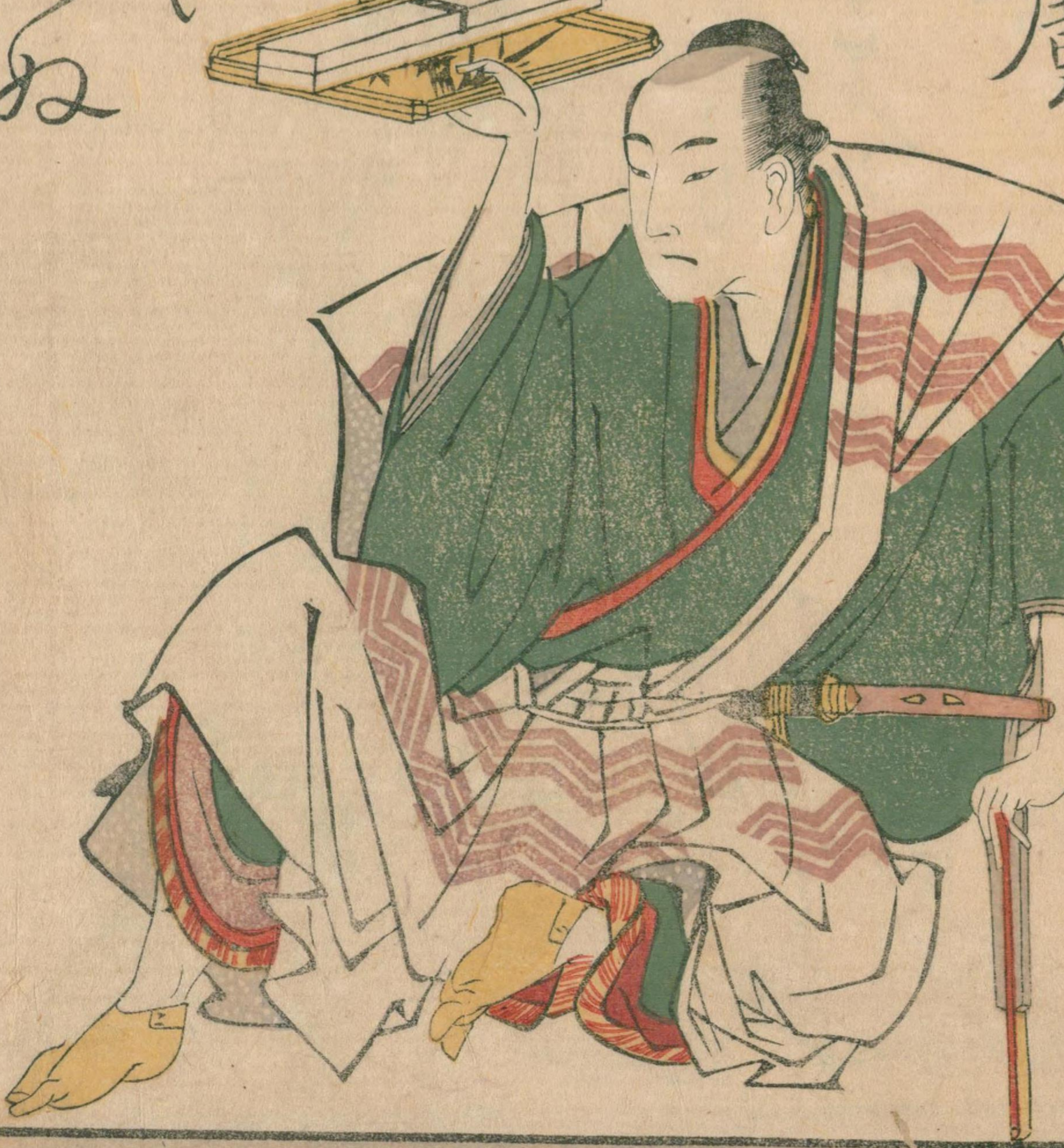
なしてあく
ちまへさく
あらぬ
うはしぬ
ま
まつ妻ハ
浪の
ゆつてのへしなく

大木辺吹方



花笠和廣

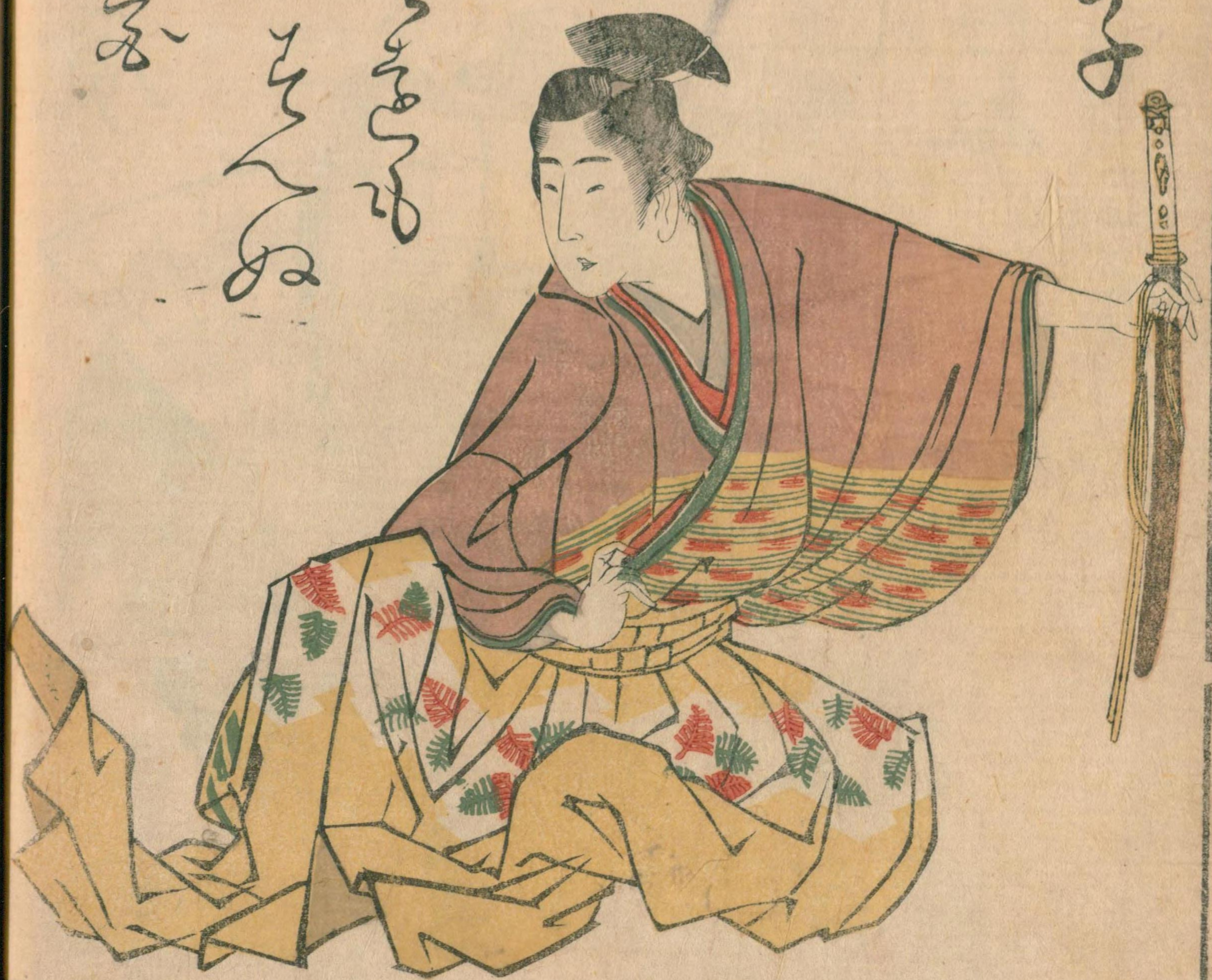
象猶を
洗ひして
足跡ん
患衣
ふまつけて
みちと
探らぬ
君みと



ガラス使用

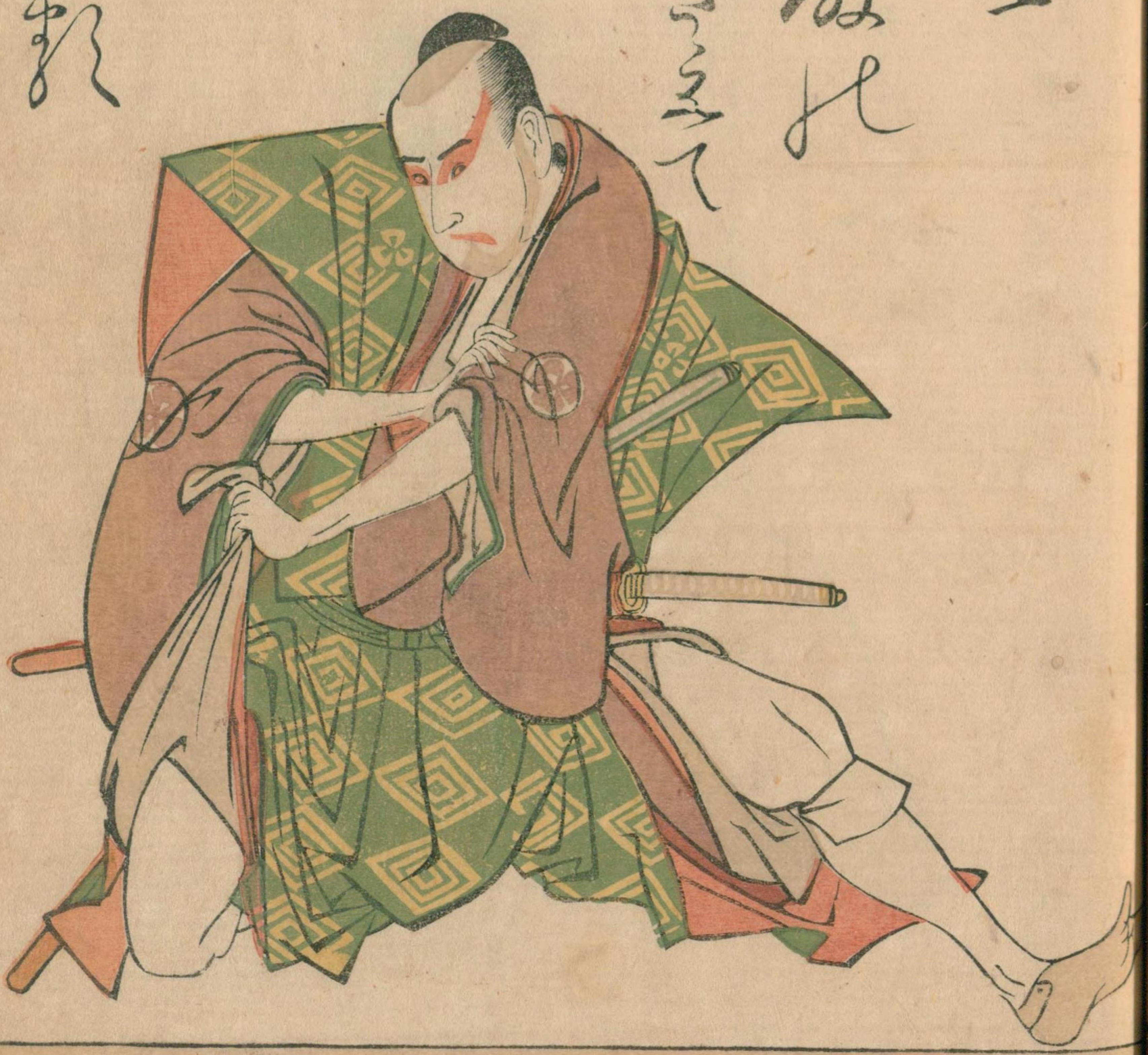
布袋唐子

志ら露の
玉みかくきや
絹ぬめん
ちつきても　そへぬ
床夜
秋草



山里東士

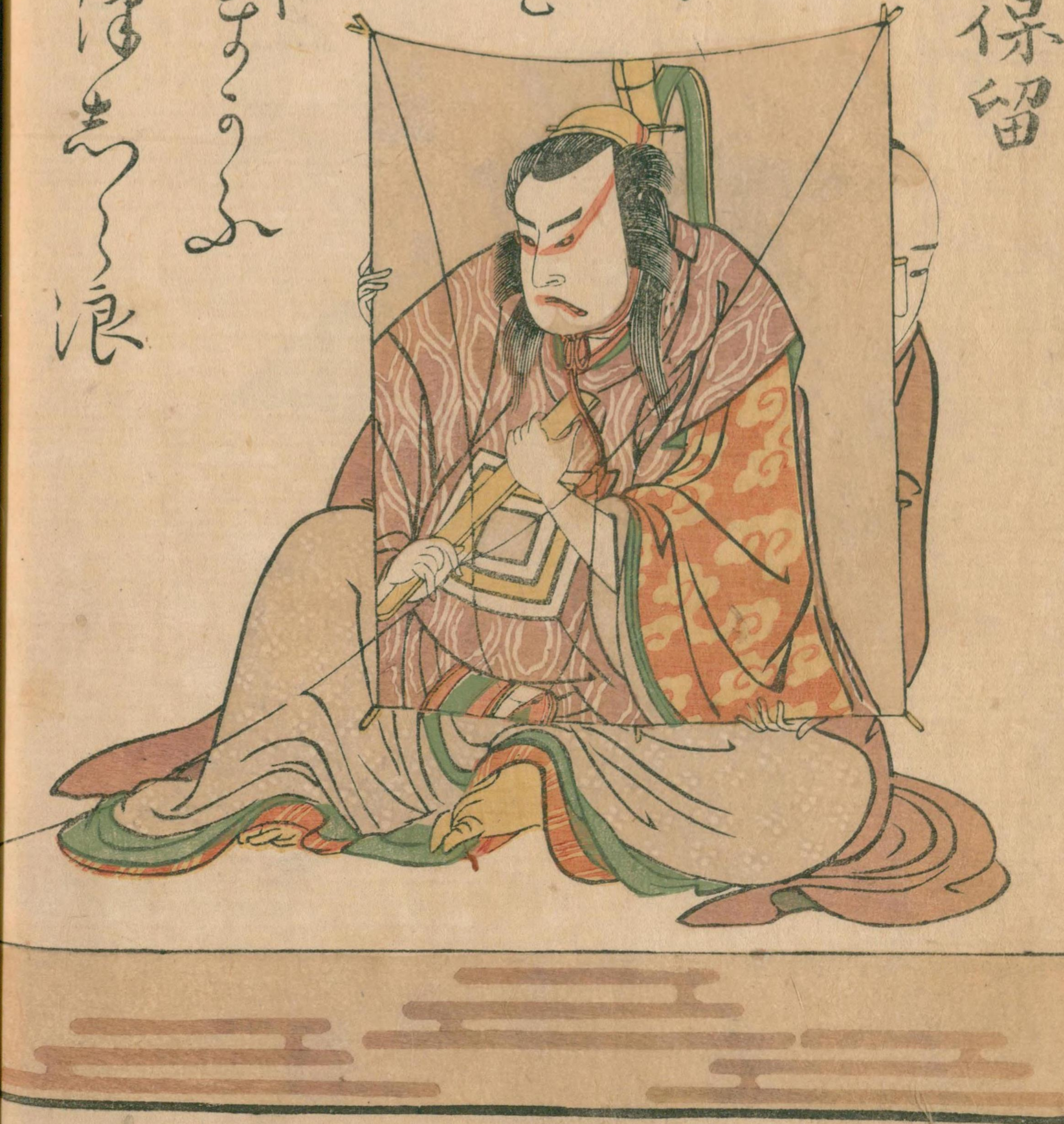
糠星ハ湯殿れ
山よ影きえて
まくらひ
ほとゝ
月を
みそぬれ



ガラス使用

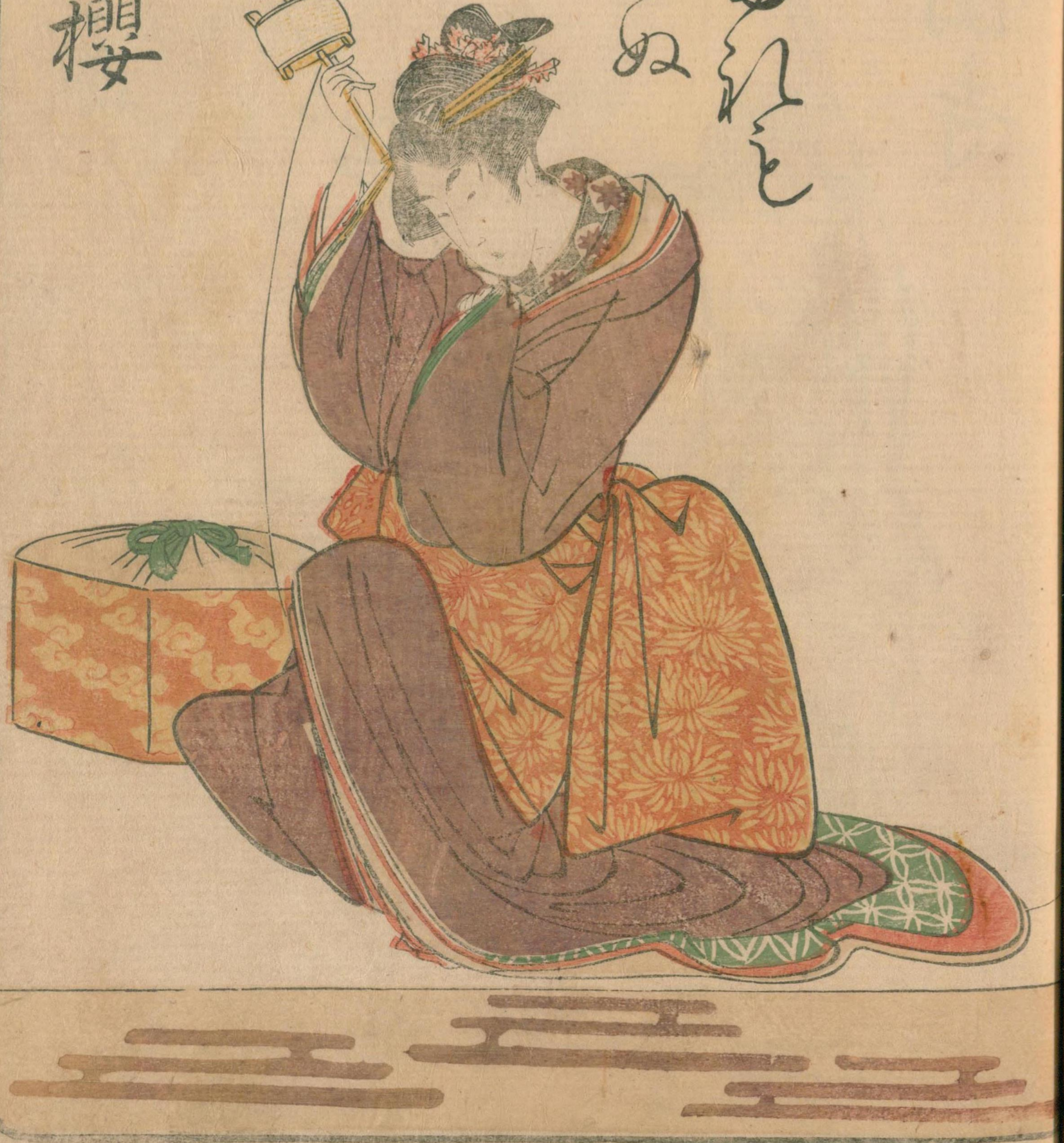
蘭麝香保留

色好みつを
いふかれ此
花覚をと
見えて見れは
雲井にし
きのふ
沖津志ら浪



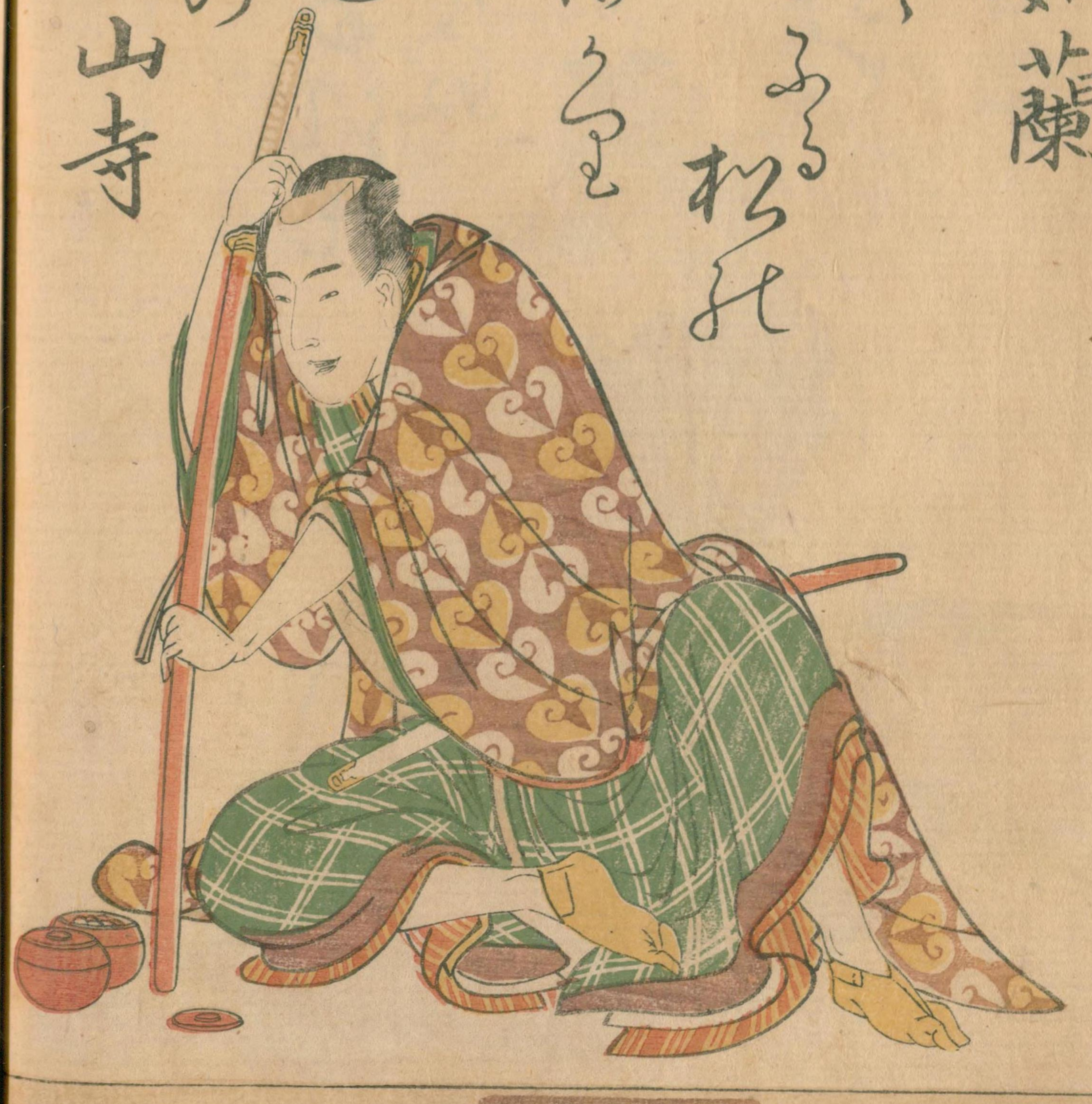
女
文暁

ゆらつはあめれとも
うへ見ぬ
木かやき
きもと
えひろ
来てる
鷲の尾櫻



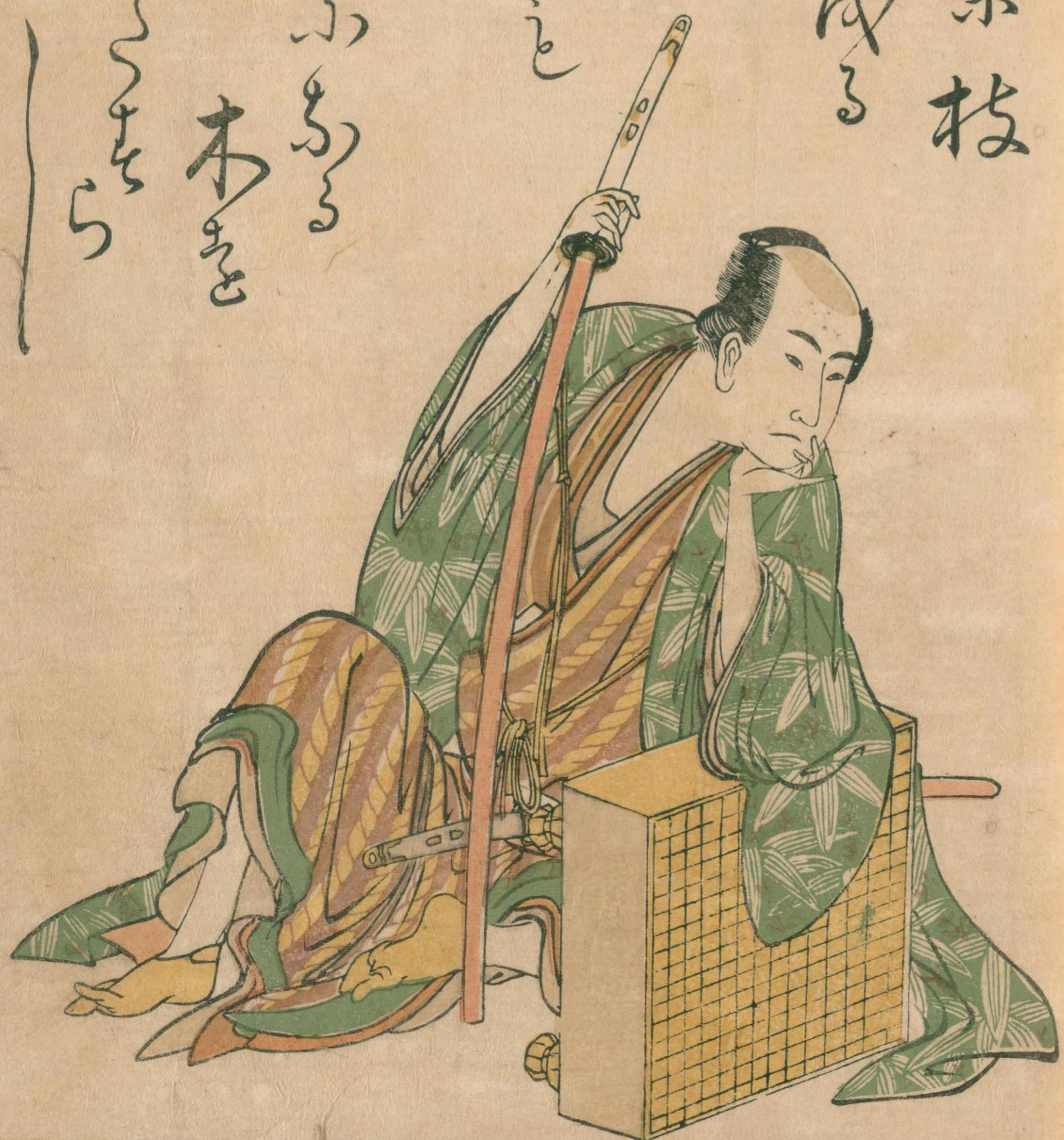
金砂如蘭

荒はてゝ
手ふる松も
うつばら里
伽藍となりし
志賀の山寺



柿葉枝

杉ゝひ蔵る
らゝ闇
ゝゝと
仙人の
うしかふる
木を
引いてきら
し



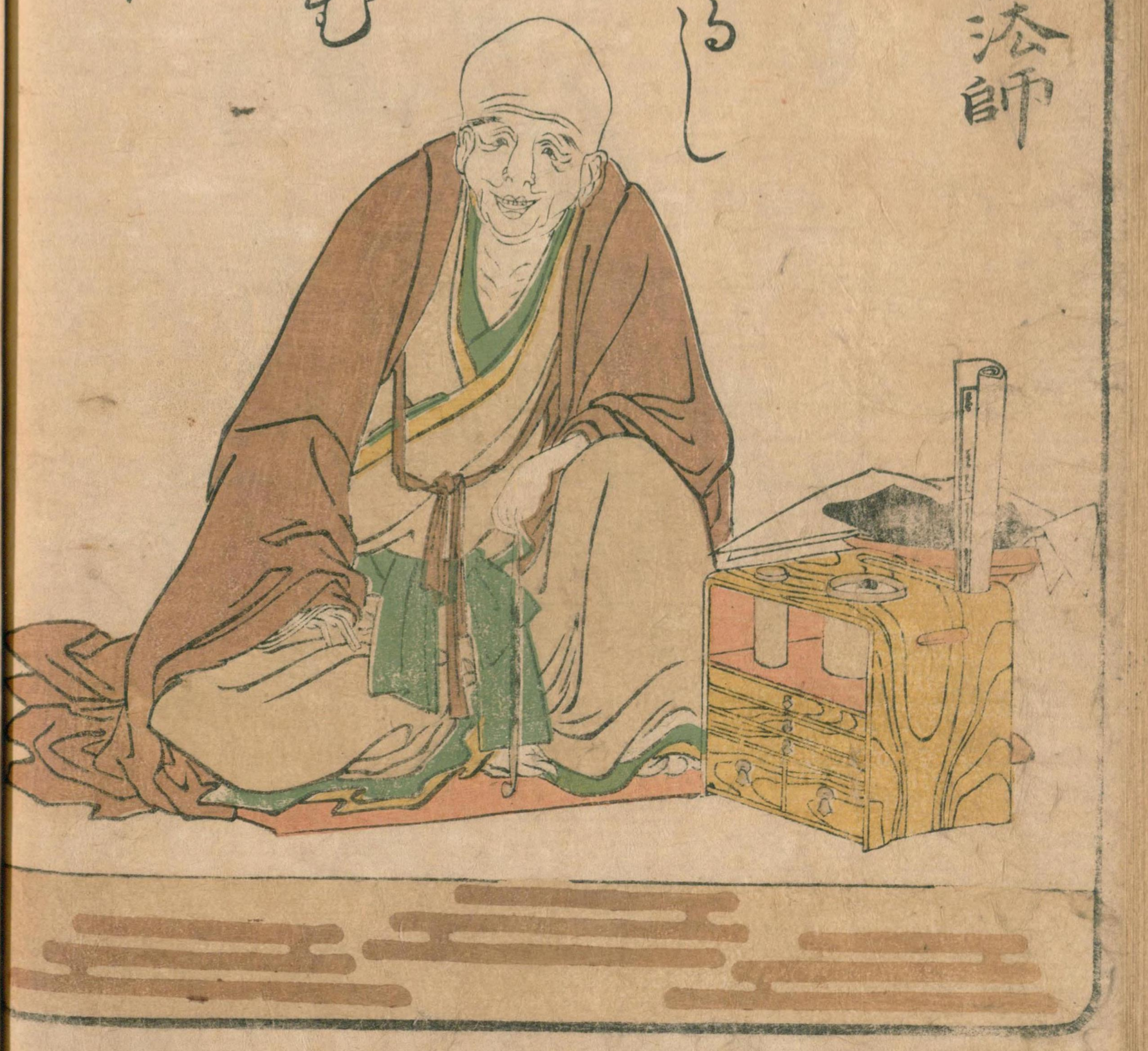
ガラス使用

り
22

五月エムシリヒメ

千秋庵三陀羅法師

小妻とは
風ふと志るし
かへるて秋
もみち花ちも
庵の池水



り
22

ガラス使用